

2015年度浦野ゼミナール卒業論文

歴史とアクターが生み出す川越のコントラスト

主査 浦野正樹 教授
早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系
地域都市論ゼミナール

1T121145-8 若槇 聡史

目次

| | |
|-----------------------------------|-------|
| 序章 はじめに | p. 3 |
| 1 基本的な問題意識、研究動機 | |
| 2 研究を行なう対象地域 | |
| 3 論文構成と先行研究 | |
| 1章 川越における歴史 | p. 6 |
| 1-1 「小江戸」川越のはじまり | |
| 1-2 二度の大火と復興 | |
| 1-3 復興後の川越発展のプロセス | |
| 2章 川越の町並み保存に取り組むコミュニティ、アクター | p. 9 |
| 2-1 保存される町、川越一番街の概要 | |
| 2-2 蔵造りの町並み(川越一番街) | |
| 2-3 「川越蔵の会」の歴史を生かしたまちづくり | |
| 2-4 オブザーバーとしての「町並み委員会」 | |
| 3章 現在の川越がある理由 | p. 19 |
| 3-1 一番街商店街や菓子屋横町などの商業が作る川越イメージ | |
| 3-2 対象浪漫通りやクレアモールなどの南側の存在 | |
| 3-3 行政、住民、川越蔵の会、町並み委員会の繋がり | |
| 4章 歴史を活かしたまちづくりの可能性 | p. 25 |
| 4-1 「明治」、「大正」、「昭和」、「平成」の時代コントラスト | |
| 4-2 残った歴史と残らなかった歴史 | |
| 4-3 歴史を活かす方法…川越を学ぶ | |
| 終章 おわりに | p. 30 |
| 1 論文のまとめ、論文の関係図 | |
| 2 論文の意義 | |
| 3 謝辞 | |
| ～参考文献～..... | p. 39 |

序章 基本的な問題意識、研究動機

私は埼玉県にある新座市に住んでいる。この地域はにんじんが特産物で、どこにでもある普通のベッドタウンである。駅の近くに行くほど人通りが増え、外周へ行くほど人通りは少なくなっていく。ここからは少し私的な話になるのだが、私は東武東上線を普段利用する。この路線は東京都豊島区の池袋と埼玉県大里群の寄居を結んでおり、東京方面の駅を経れば経るほどより都会としての特長を持った町並みが広がっていく。その事とは逆に埼玉の奥へ行けば行くほど田園や住宅街が広がっていき、どこか寂れたとは言わないまでも活気のない情景…田畑や河川が広がっている。しかし東武東上線上にある埼玉県川越駅、西武新宿線上にある本川越駅から徒歩で10分程、北へ歩くと、駅周辺とは違った空気の町並みが現れる。昔「世に小京都は数あれど、小江戸は川越ばかりなり」と呼ばれた地域の一つである川越藩の城下町、川越市である。最初にこの地域を訪れたとき私が感じたことは歴史ある建物が発する雰囲気と商店街の中でお祭りでも行なわれているのかと勘違いするような活気の入り混じったなんとも言いがたい雰囲気があり少し戸惑い、そしてその中でたくさん観光客が買い物をしていることにも驚いた。

この事実と絡めて気になった問題がある。私は近年、歴史的建造物の破壊が問題になっているというニュースを見かけた。しかし、この川越という地域は歴史を「売り」にして商売を行なっている地域である。この地域を見るとこのニュースとは無縁のように思えてくるが、何故この地域の歴史は生き残っているのか、という点に疑問が沸いたし、渋谷や新宿などとは明らかに違う長所(恐らく)を売りにして商売を行なっているこの川越の城下町だが、そこに何故、埼玉県の南西にあるこの一見、歴史だけを売りにしたような建物が並んでいるだけの所にこんなにも観光客が集い、活気がある町を維持できているのかという点にも疑問が沸いた。私はこの二点、つまり、何故川越一番街がこんなにも観光客数を伸ばしているのか、何故、川越の蔵造りの町並みが保存されているのか、ということに疑問が沸き、今回、卒業論文として川越を取り上げることにした。近年、日本において文化財の保護が謳われる一方、マンションやデパートの建設により、その地区に古くからある価値ある建物などが壊されたりしている。坂口安吾著作の『日本私観』の中にも「…多くの日本人は、古い故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。…伝統の美だの日本本来の姿などいふものよりも、より便利な生活が必要なのである。我々に大切なのは『生活の必要』だけで古代文化が絶滅しても、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。」(坂口安吾 1996 pp.128)とある。しかし、伝統の美を活かしつつ、残しつつ、さらに発展を目指している地域として身近にある川越市の一番街(蔵造りの町並み)があり、何故この地域には歴史ある建物が残り続けているのかということに疑問を抱き、論文の研究対象として取り上げるに至った。

2. 研究を行なう対象地域

今回研究の対象として挙げる地域は埼玉県川越市である。川越市は現在人口約34万人の中核都市であるとともに、「小江戸」と呼ばれる歴史都市でもあり、シンボルのとして「時の鐘」を挙げるができるだろう。また、この町には昔から商業地として栄えた一番街通りがあり、その通りの両側に古くから残る蔵づくりの町並みが広がり、国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも選定されている。この蔵作りの町並みを保存していく活動がこれまでに盛んに行なわれてきた。1970年代は、商店街の衰退や、マンション建設がなされるという状況の中で、専門家による町並み保存の提言や、地元有志、青年会議所による保存運動が行なわれていた。そして今回調査する地域西武線本川越駅の以北に位置する川越一番街(地図1参照)はもちろん、現在もまちづくりが行なわれている大正浪漫通りや本川越駅周辺のクリアモール一帯と本川

越駅周辺も今回の調査対象地域になっている。今回、大正浪漫通りやクレアモールを追加した理由は、川越一番街商店街を調べていくと、一番街商店街はこれらの地域と関係を有していることが分かったので追加したという消極的な理由もあるが、今回調査を行なった川越一番街商店街の事例を他地域と比較することで川越一番街という歴史を残す為には何が必要なのかということを探き彫りにできるのではないかと、という積極的な理由も有している。

地図 1-1 研究を行なう対象地域地図



(川越 甘味屋 あかりや からの参照)

3. 論文構成と調査方法

今回この論文を作成するにあたっては、主に文献調査とフィールドワーク、ヒアリング調査を兼ねた実地調査を主に研究を進めていった。文献調査においては、早稲田大学内の図書館や市役所内のデータを主に用いている。実地調査、フィールドワークという点では本川越駅から川越一番街へと繋がる部分を歩き、実際にどのような蔵造りの町並みが広がっているのかということに着目しながら行なった。また、ヒアリング調査はNPO法人「川越蔵の会」の野村様と川越市役所都市景観課の大竹様にご協力をして頂いた。

論文構成は 1 章においては論文の核である川越一番街の歴史や地理関連を詳しく述べていく。2 章にお

いては川越一番街で活動するアクターである NPO 法人「川越蔵の会」や「町並み委員会」に関する具体的な記述を行ないたい。3 章においては川越一番街周辺にある大正浪漫通りや西武線本川越駅周辺、クレアモールに関する考察を行い、これらの周辺地域と川越一番街がどのような関係性を有しているのかということ述べたいと考えている。4 章においては調査において分かった川越市の時代「コントラスト」と、何故川越一番街が今もなお残り続けているのか、また逆に時代を経る中で、一番街の中においてどのような歴史が消えてしまったのか、消えてしまった要因について言及していき、川越市におけるまちづくり、歴史を活かしたまちづくりが成功した要因を述べていきたい。終章において今回の論文の関係図を提示し、締めくくりにしたい。

1章 川越における歴史

1-1 「小江戸」川越のはじまり

現在の川越は、太田道真が上杉持朝の命によって築いた川越城(1457年時)の城下町であったという歴史があった。ここでは全ての川越の歴史を述べることはできないので「小江戸」のきっかけとなった要因を述べていきたいと思う。川越という地域が「小江戸」と呼ばれ、栄えた理由はこの地域を囲む新河岸川と江戸との舟運によるものとされる。川越と江戸を結ぶ新河岸川の舟のルートは江戸時代において「知恵伊豆」の異名を持った松平信綱による改修工事¹により開かれた。川越から江戸へと舟運にて運ばれたものは米、麦、醤油、炭、石灰、そうめんなどがある記録によればこれは川越において新田開発が進み、米の生産量が増えたものと思われる。そしてその逆、江戸から川越へと運ばれたものは干鰯、ぬか、灰、砂糖、塩魚、油、石、塩などの人の生活には欠かせない必需品類が並んでいる。こうして川越は江戸との交流を経て、経済的にも物質的にも繁栄を遂げていった。この松平信綱が行なった新河岸川の改修工事が間接的に川越一番街の蔵造りを建築するに至る川越商人達を支えていたといっても過言ではないだろう。

次に上記した中で「小江戸」という名称について、新河岸川の改修や他の事業を行なった松平信綱について述べておきたい。まず「小江戸」とは言葉は現在の埼玉県川越市だけを指す言葉ではない。「小江戸」と冠される地域は日本の中で三つ確認されており、一つ目に栃木県栃木市があり、二つ目に千葉県佐原市があり、

三つ目に埼玉県川越市がある。この三つの都市に共通していることは江戸との舟運により交流(文化的に、経済的にも)を行い栄えたという点、蔵造りの町並みを有しており、なおかつ山車を出す祭りがあることが挙げられる。これは恐らく江戸という文化を舟運を通して獲得することができた為と思われる。そして「小江戸」と似た言葉に「小京都」という言葉がある。この言葉の紹介は深くは行なわないが、「京都市観光協会による全国京都会議会員市長には平成23年現在『小京都』として全国50の市町村が登録している。」(櫻井 pp20)とあるように「小江戸」と比べると数は多いと言える。「世に小京都は数あれど、小江戸は川越ばかりなり」という評判も「小京都」と「小江戸」を比較し、川越の豊かさを表現している。

次に既に文中に出てきている松平信綱の紹介を行ないたいと思う。松平信綱(1596~1662)は徳川家康の家臣を親に持ち、武蔵国に生まれた。当時の川越は江戸の重鎮が行き来を行い、陸路においても江戸との関係を持っており、重要な都市の一つであったと言える。信綱は川越で行政活動を行う前に「島原の乱」²「慶安事件」³の二つの問題の解決し、その手腕を買われ1639年に初代川越藩藩主に封ぜられた。この後に信綱は野火止新田の開発や上記した新河岸川の改修工事を行い、江戸との舟運を可能にした。そして1657年に江戸において「明暦の大火」が起り、信綱はその際の復興に一役買っていた。

1-2 二度の大火と復興

ここでは1638年に川越にて起こった「寛永の川越大火」と1893年にも起きた「川越大火」の二つの火事について述べつつ、その復興のプロセスを見ていきたい。はじめに「寛永の川越大火」について述べていく。「寛永の川越大火」は寛永15年の1月28日に起きた火事である。「川越の城下町」では当時の記録を克明に残している。「(前略)星野山御建立記は『町並み城内家三百軒ほど焼き払い、仙波藤堂など残らず焼失、喜多院、慈恵堂炎上、権現宮までみな焼き払ひ、中院、南院、広仙坊門前など一字も残さず焼失』とあり、相当な大火事であったことを覗うことができる。この大火事後、信綱は初代川越藩藩主に封ぜ

【注】今回、川越市の歴史を述べるにあたり、蔵造りの町並みに主観を当てたい為、「小江戸」川越の形成されるきっかけとなる江戸時代(1603年~)からの歴史事項を書いていく。

¹行なった改修工事は川自体に「曲がり角」を多数作り、流れを安定化させる意図があった。また新河岸川自体が浅い為、舟も底の深いものではなく、浅いものが使用されていた。

² 1637年に天草四郎が首領となり、土豪、百姓と共に起こした日本最大級の一揆

³ 1651年に由井正雪が当時の浪人たちを指揮し、江戸幕府重鎮達を一掃する作戦を練っていた。

られ、復興に取り組むこととなる。主に信綱が川越に対して行なった行政政策は新河岸川の改修工事、野火止新田の開発、「寛永の大火」後の川越城下町の町割りを行った事である。新河岸川の改修工事と野火止新田の開墾は無関係ではなく、川越から江戸へ米が運ばれていた事実があり、計画的に信綱は川越の発展を見据えていたことが分かる。そして重きを置いて述べたい事は「寛永の大火」後についての復興についてである。信綱は復興の際にまず町割りを行った。これが十ヶ町四間前町である。この整備にて区画ごとに職業を割り振り、仕切られた場所に住民を住ませた。(具体的には城の北と南回りを武家地とし、商人町を上五ヶ町、職人町を下五ヶ町と割り振った。)しかし、火災後であっても神社仏閣の多いこの地では、信綱といえど神社を取り壊して区割りを行う事はせず、神社を避けて区割りを行った為か、川越本丸御殿から徐々に南下していくように細長の区割りが行なわれていった。

そして次に川越が大火に見舞われたのが1893年の「川越大火」である。この大火では南町や江戸町、連雀町などが被害を被り、特に織物、穀物を扱う商屋が大きい被害を被った。資料(川越市川越重要伝統的建造物保存地区 伝建地区の概要)では「川越の3分の1以上が焼失」とある。そしてこの火事を凌ぎ、周囲から注目を浴びたのが蔵造りの建物である。(この時に残ったのが重要文化財に指定されている大沢家であると言われている)当時の川越商人達はこの後に財を投じ、蔵造りの建物を建築するに至る。これが現在の川越一番街の原型とも言えるだろう。

1-3 復興後の川越発展のプロセス

川越商人達が江戸時代から明治時代を通して蓄積した富により川越はある程度の復興を遂げたが、復興から発展へと至る大事な要素が鉄道の通過である。川越市は現在、東武東上線「川越駅」「川越市」と西武線「本川越駅」が通っている。明治に起きたこの大火の後発展の重要な要因を担ったのは西武線と川越が鉄道で繋がったことである。1893年に川越大火が起こり、そのわずか2年後である1895年に川越鉄道という名称で川越駅が開業した(現在の西武線本川越駅)。しかし、川越駅が開業し、後にこの西武線だけではなく、東武東上線も開通し、「川越駅」「川越市駅」ができることにより、商業の中心(元町や仲町、幸町)がこれらの駅の北に位置する川越一番街よりも南(新富町)に移りかわってきた。(図1-2参照)商業の中心地が南へと移った1950年代から1960年代後半に北の蔵造りの町並みの取り壊しが進み、中層マンションの開発や車の急速な普及に伴い駐車場の建設も相次いだ。ベッタウン的な性格を強めていったこのプロセスを調べていく最中、また資料を読んでいる中で疑問に感じた部分がある。商業の中心が北から南に移ったからといって何故、北に位置する川越の蔵造りが取り壊されるに至ったのかという点である。大火の後打撃を受け、わざわざ立て直したものを何故売り払ってしまったのだろうか。これは恐らく第二次世界大戦中や大戦後による困窮による面が非常に大きいものと思われる。さらに、蔵造りの建築はその構造上、光を取り入れ辛く、商売を行なう中で商品が見辛い、という理由や南側へ駅ができたことにより、南側の地価の増加に反比例する形で一番街付近での土地の下落があり、そこに建築業者が参入し取り壊しが相次いだ。この時に川越市は蔵造りの町並みに補助などは行なってはおらず、専門家達に蔵造りの大切さを説かれ、景観条例を發布するが、住民アクターからは理解が得られていなかった。一方南側は大型商業施設が立ち並び、集客性を高めていった。⁴

⁴ 1967年には本川越駅のわずか40~50m東にイトーヨーカドー川越店が開店し、周辺の駅周辺のクレ

図 1-2 商業中心地の変遷



(川越 甘味屋 あかりや からの地図に筆者が加筆を加えたもの)

アモールも賑わいを見せていた。またこの頃に「丸井」や「西友」などの大型商業施設も開店している。

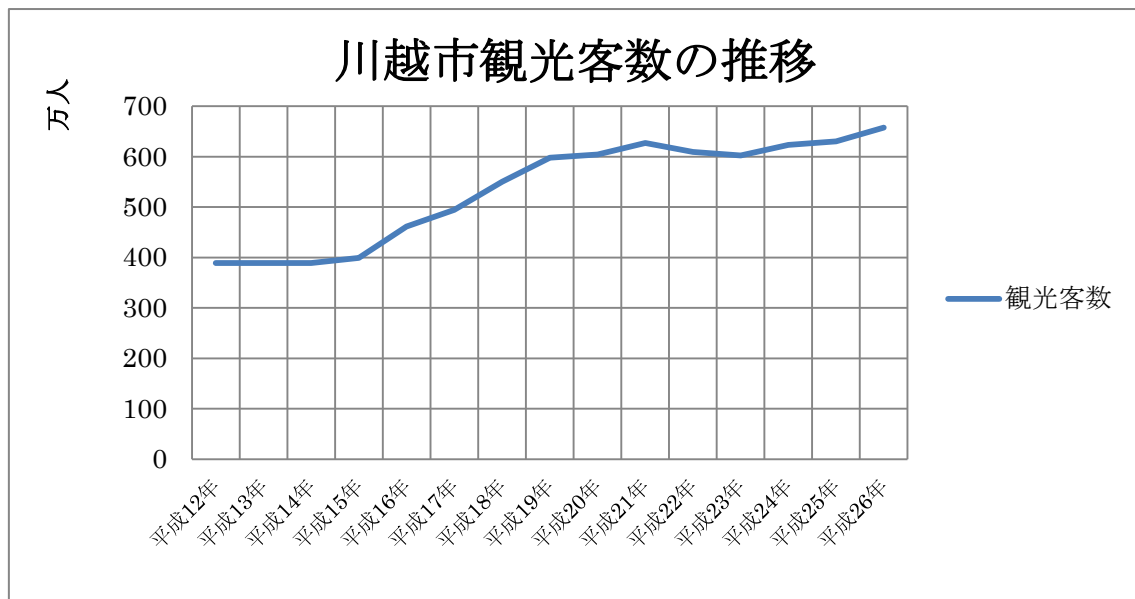
2章 川越の町並み保存に取り組むコミュニティ、アクター

2-1 保存される町、川越一番街の概要

1章においては川越がどのような経緯で蔵造りの町並みが出来上がっていったのかという点に関する歴史を見てきた。ここでは現在の川越について見ていきたい。現在の川越は蔵造りの町並みがあるのは勿論、東京からも比較的近く、川越市内には歴史においても触れたとおり、西武線や東武東上線が通っており、交通の便も非常に良い。またこれらの要因の為か川越市は2016年現在でも人口が増加し続けており、今では36万人を記録している。

次に述べたいのは川越市に訪れる観光客数の推移である。これも年を経るにつれて増加の傾向にある。しかし、今では650万人の観光客数を誇っているが、1950～1960年代後半の間は川越一番街の蔵造りの建築の取り壊しが進んでいた。そして観光客数の推移記録によれば記録をはじめた1957年の観光客数は150万人程度であったようだ(2011年に若干の低下があるが、これは東日本大震災によるものであり、これによる影響があるものと思われる)。

図2-1 観光客数の推移



(川越市都市景観課から頂いた資料を元に筆者作成)

川越一番街の蔵造りの町並みは明治期に川越商人が建築したものと前章では述べた。これに関連させ、蔵造りの建物がどのようなものなのかをここで述べておこう。蔵造り(写真1)とは土蔵を築き上げ、店舗、蔵として利用する目的で建てられたものであり、川越の蔵造りは店舗と蔵を併用する形で建てられたものが多かった。

写真 2-1 蔵造りの建築



(google 画像より)

これらの蔵造りの町並みの破壊が進んだ背景には企業のマンション建設が始まったことにあり、この時に蔵造りの町並みは市の法的保護下にはあらず、企業は蔵造りを壊してマンションを建てることに罰則は与えられていなかった。1960年代当初は川越市役所の都市景観課が付近住民などに働きかけても、「川越蔵の会」や「町並み委員会」は存在しておらず、有志で蔵造りの建築を守ろうとする者も数は多くなかった。しかし企業の取り壊しが加速することが皮肉にも住民の保護意識に火をつけ、行政も景観条例の制定を急ぐなど目的意識が一致したことにより1960年代後半以降蔵造りの町並みは保護を受けることになる。以下に川越市教育委員会文化財保護課の加藤 忠正氏が作成した歴史年表がある。

図 2-2 川越市まちづくり年表

| | | | | | |
|---|--------------|------|------------------------|----------------------------------|-----------------|
| 伝 統 的 町 並 み 保 存 の 動 き | 1965～ | S40 | ○ | 専門家による問題提起 | |
| | 70 年 代 | 1971 | S46 | ● | 城下町川越開発委員会 |
| | | | | ● | 旧万文取り壊し反対運動 |
| | | | | | 「大沢家住宅」重要文化財に指定 |
| | 1972 | S47 | ● | 川越市史跡保存協会発足 | |
| | 1973 | S48 | ● | 川越青年会議所報告書 | |
| | 1974 | S49 | ○ | 日本建築学会関東支部による「歴史的街区保存計画」コンペが行われる | |
| | | | ● | 川越市文化財保護協会発足 | |
| | 1975 | S50 | | 伝統的建造物群保存地区保存対策調査 | |
| | 1976 | S51 | ○ | 川越環境会議 | |
| | | | 伝建調査報告書「蔵造りの町並み」発行 | | |
| 1977 | S52 | ○ | 全国歴史風土保存連盟川越大会 | | |
| 1978 | S53 | | 蔵造り資料館（旧万文、現市立博物館分館）開館 | | |

| | | | | | |
|----------------|-----------------------|------|------------------------------|----------------------------|-----------------------------------|
| | | | ● | マンション建設反対運動 | |
| 町並み形成のための体制形成期 | 80年代 | 1980 | S55 | ○ | 環境文化研究所による自主研究 |
| | | 1981 | S56 | | 蔵造り 16 棟市文化財指定（現 22 棟） |
| | | 1982 | S57 | | 「川越の町並みとデザインコード」報告書 |
| | | 1983 | S58 | ○ | 「川越蔵の会」発足 |
| | | | | | 市指定文化財調査報告書発行 |
| | | 1984 | S59 | ■ | 新富町まちづくり協議会発足 |
| | | 1985 | S60 | ○ | 東京シンポジウム（川越蔵の会） |
| | | | | ■ | 来街者アンケート実施（3日間）し、アンケート結果のパンフレット発行 |
| | | 1986 | S61 | ● | 川越一番街活性化モデル事業調査（コミュニティーマート構想） |
| | | | | | 歴路事業調査 |
| | | | | | 札の辻ポケットパーク整備 |
| | | 1987 | S62 | | 都市景観審議委員会議発足 |
| | | | | ● | 町並み委員会発足 |
| | | | | ■ | まちづくり協定の検討 |
| ○ | 蔵詩句大賞創設（蔵の会建築賞） | | | | |
| ● | 埼玉銀行（現あさひ銀行）ポケットパーク整備 | | | | |
| 1988 | S63 | ● | 「町づくり規範」の制定 | | |
| | | ■ | 新富町まちづくり協定の制定 | | |
| | | ○ | 小江戸川越景観賞設置（川越商工会議所、S63・H1のみ） | | |
| 1989 | H1 | | 都市景観条例施行 | | |
| | | | 観光市街地形成事業開始 | | |
| | | | 歴路事業整備開始 | | |
| 町並み・界限形 | 90年代 | 1990 | H2 | 川越市立博物館開館 | |
| | | | | 川越駅東口再開発竣工 | |
| | | | | 川越駅東口広場「公共の色彩賞」受賞 | |
| | | | | 川越駅東口広場モニュメント「時世」北米照明学会賞受賞 | |
| | | | | かわごえ都市景観表彰創設（川越市） | |
| | 1991 | H3 | ■ | サンロードまちづくり協定の制定 | |

| | | | |
|---------------------|------|-------------------------|-------------------------------|
| 成 期 | | | 歴路事業 菓子屋横丁通り整備 |
| | 1992 | H4 | 歴路事業 養寿院・長喜院門前通り整備 |
| | | | 電線地中化事業（一番街） |
| | | | ▲ 川越銀座街並み整備委員会の設置 |
| | | | ▲ 計画策定に関するワークショップ |
| | 1993 | H5 | ▲ 「街並み及び環境整備実施計画」策定 |
| | | | ● 十ヶ町会（旧城下町エリア自治会）発足 |
| | | | ○ 第16回全国町並みゼミ川越大会開催 |
| | 1994 | H6 | 電線地中化事業（かねつき通り） |
| | | | ▲ 大正浪漫のまちづくり協定の制定 |
| | | | ▲ 大正浪漫委員会発足 |
| | | | 彩の国さいたま景観賞受賞（一番街電線地中化事業） |
| | | | 川越市町並み改装事業（～H10） |
| | 1995 | H7 | ▲ アーケードの撤去 |
| | | | ■ サンロードモール化計画の検討、電線地中化開始 |
| | | | ● 一番街町並み委員会「まちづくり功労者表彰」受賞 |
| | 1996 | H8 | ● 十ヶ町会 住民アンケート実施 |
| | | | 時の鐘 残したい日本の音風景百選選定 |
| | | | あさひ銀行 国の登録有形文化財に指定される（埼玉県第1号） |
| | 1997 | H9 | ▲ 大正浪漫夢づくり設計コンペ開催（大野屋） |
| | | | ■ サンロード商店街側のモール完成 |
| | | | ■ 一般公募による道路愛称「クレアモール」決定 |
| | | | 小江戸サミット開催（実行委員会） |
| | | | 川越ストリートミュージアム '97 開催（実行委員会） |
| ● 十ヶ町会伝建地区指定の要望書を提出 | | | |
| 1998 | H10 | ▲ バリアフリー策定調査 | |
| | | ▲ 川越商工会議所 登録有形文化財に指定される | |
| | | 彩の国さいたま景観賞受賞「大野屋」 | |
| | | ● まちかどミュージアム開催（青年会議所） | |

| | | | |
|------|-----|---|---------------------------------|
| | | | 川越市伝統的建造物群保存地区保存条例施行 |
| 1999 | H11 | | 川越市伝統的建造物群保存地区都市計画決定 |
| | | | 中央通り線の都市計画変更 |
| | | ■ | クレアモールのモール化事業完成 |
| | | ● | グットデザイン賞アーバンデザイン賞「川越一番街蔵造りの町並み」 |
| | | | 重要伝統的建造物群保存地区に選定される |
| 2000 | H12 | ● | 商店街魅力創出計画策定事業報告書 |
| | | | 都市景観大賞都市景観100選「川後歴史的町並み地区」 |
| | | | 重要伝統的建造物群保存地区一周年記念行事開催 |
| 2001 | H13 | | 歴路事業 大正浪漫夢通り線完成 |
| | | | 第5回音風景保全全国大会開催 |
| | | ▲ | チャレンジショップ夢の市オープン |
| 2002 | H14 | ▲ | 彩の国さいたま景観賞「大正浪漫夢通り」 |
| | | ● | 20世紀景観賞（埼玉県）特別賞「川越一番街まちづくり」 |
| | | | 歴路事業 行伝寺門前通り線完成 |
| | | | 川越市立美術館開館予定 |
| | | | (仮) お祭り会館着 |

凡 例

| | |
|----|--------------|
| ○ | 外部、民間の動き |
| ● | 一番街及び周辺地区の動き |
| ▲ | 銀座通りの動き |
| ■ | 新富町・サンロードの動き |
| 無印 | 行政の動き |

(※川越一伝統を活かしたまちづくりからの引用)

この年表を見ると初期の頃を見ると一番街付近における整備が活発に行なわれており、年を経るにつれて銀座通り(大正浪漫通り)や新富町などの再整備が行なわれていることがわかる。またこの年表に付け加えを行なうならば、2006年には「町並み委員会」が日本都市景観家大賞を受賞し、同年に川越城が日本百名城に選定され、2007年にはスウェーデン国王、王妃が来日し、天皇皇后両陛下も川越一番街を訪れている。2000年代後半は1960年代後半に行なった町並み保存が対外的に評価され始めたといったところだろう。これは観光客数の増加を見ても分かることだろう。

2-2 蔵造りの町並み(川越一番街)

蔵造りの町並みは2-1で述べたように川越大火の後、川越商人達が改めて土蔵の漆で塗られた建造物の

防火性の高さを認識し、建てられた為に生まれた。そして現在、この蔵造りの町並みは主に4つのアクターによって支えられ、発展を遂げている。以下では川越のまちづくりを支えつつ、発展に貢献している4つのアクターの概要と、蔵造りの町並みの保存活動の例を具体的に述べていきたい。まず初めに4つのアクターの概要だが、第一に「行政」、つまり川越市役所がある。川越市役所の中において主に蔵造りの町並みだけではなく、大正浪漫通りなどの整備、景観管理などを行っており、具体例を挙げるならば、1997年「十ヶ町会」が提出した伝建築認定の要望書を受け、伝建築の調査依頼を国に行い、2年後には伝建築へと選定された。この例を見ても分かる通り、住民のニーズをいち早く察知し、それを実現させたり、検討を行なうアクターが「行政」だと言える。さらに、民間の中で行なわれたまちづくりを表彰、助成するのも「行政」（ここの部分の行政のみ伝建築の選定などもあるので国と市を含んだ行政）である。今回、川越市の部署の一つである「都市景観課」の方にお話を伺うことができたので町並み保存の経緯を後述していきたいと思う。

第二のアクターに「川越蔵の会」がある。「川越蔵の会」は昭和58年に発足し、構成メンバーは学識者、地元の住民、学生、川越市市役所職員などで構成されており、2015年現在では208名が会員メンバーとして活躍している。「川越蔵の会」は発足当初は市民団体として活動していたが、2002年には「特定非営利活動法人 川越蔵の会」になり、NPO化を遂げている。川越蔵の会は発足開始時から川越活性化、蔵造りの保存に取り組んできている。また、「川越蔵の会」は一番街のまちづくりや活性化に携わっているだけではなく、大正浪漫通り商店街復興組合や他の商店街(新富町商店街など)との関わりをもっており、行政が行なう「まちづくり」や「活性化」の支援をしている。

三つ目アクターである「町並み委員会」は昭和62年(1987年)に発足した。委員の構成は一番街商店街から8名、4つの自治会から8名、NPO法人川越蔵の会から5名、学識者4名の25名で構成されている。「町並み委員会」は「町づくり規範」を規定し、蔵造りの町並みを、伝統的建造物群に認められるような活動を行っていった。「町並み委員会」は一番街の保存だけではなく大正浪漫通りに接する住宅の外見の修理に関する助言や、川越市内の一般住宅の新築を手伝うなど幅広い活躍を見せている。

最後のアクターに「住民」⁵を挙げることができる。ここでいう「住民」は「行政」のような他のアクターの動きを抑え込むことなどを行なうことはできなく、「町並み委員会」や「川越蔵の会」のようにまちづくりに関する知識などを持ち合わせてはいない。しかし、住民は「川越蔵の会」や「町並み委員会」、「川越市役所」が行なう蔵造りの町並みを保存する活動に反対しているのかというと反対はしていない。ここからの考察は自身が行なったヒアリングからの推論の域を出るものではないが、川越に住んでいる住民は「川越蔵の会」が行なう地域活動、イベントなどに積極的に参加をしている。このことから住民は川越市に住んでいること、「一番街が自分の住む地域にあること」にどこかアイデンティティを感じている部分があるのではないか。川越大火の後、川越という地域を去らずに蔵造りを建て、繁栄をした川越商人達の想い残っているとまでは言うことはできないが、残滓のようなものを上記4つのアクターからは感じ取ることができる。

そして次にこれらのアクターが行なった事業の一つの例として一番街電線の地中化を取り上げたい。一番街の電線が地中化する以前は4m以上の電線が蔵造りの町並みを取り囲むような状態で配置されており、電線の上部に位置するトランス⁶が蔵造りの景観を妨げていた。しかし、一番街全体の電線の地中化を行なうには莫大な費用がかかる。かといって電線を取り払いなどしたら信号や付近の住民や店主が迷惑を被ってしまう。この時、発足して間もない「川越蔵の会」の会長の原氏が一番街で進んでいた水道の配管工事に着目し、これと同時に電線地中化を行なうことを発案し、市にもちかけた所、上記したトランス部分の地中化は技術上不可能であると棄却されてしまった。後に周囲の店主や一番街に面しているりそな銀行に

⁵ 「住民」というアクターは具体的には一番街店主の家族や、一番街付近の住民から大正浪漫通り付近のマンション住民、新富町付近の住民も指す。

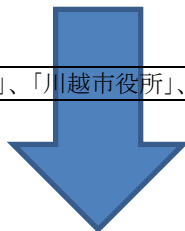
⁶ 柱上(電力)変圧器のことを指す。一番街は信号が多いため、電線を置かなければ交通整備が行なえない状態であった。

頼み込み、トランスを店の敷地内置いてもらうことに成功し、この事業を完成させた。

景観整備が行なわれず、むき出しになっている電線(昭和40年から平成1年の都市景観条例が施行される前の一番街商店街)



「川越蔵の会」、「川越市役所」、「町並み委員会」、の尽力により



平成4年に一番街の電線地中化が行なわれた後の景観



この事業では銀行などの一般企業が自らの敷地を電線地中化という公共事業の為に提供したという点が一般企業の利潤最大化という名目と相反しているにも関わらず、これを受け入れたことは一番街を思う気持ちをよく表していると同時に、このトランスの地中化の時に「川越蔵の会」や「町並み委員会」からの要請が真摯なものであり、りそな銀行を納得させるだけの説得力があったのではないだろうか。

このことから電線地中化という事業一つを取ってみても「川越蔵の会」の努力や「町並み委員会」が定めた「まちづくり規範」、市が1960年代からあきらめずに蔵造りの建物の魅力を伝えてきたことの積み重ねの存在として理解することができる。

2-3 「川越蔵の会」の歴史を活かしたまちづくり

ここでは前章で触れた NPO 法人「川越蔵の会」の詳細やこれまでに行なってきたまちづくりを平成 27 年 11 月 4 日に行なった「川越蔵の会」に関するヒアリングを交えて述べていきたい。

今回行なったヒアリングは NPO 法人「川越蔵の会」の野本様にご協力を頂いた。

Q1:「川越蔵の会」の NPO 法人化について、資金繰りについて。

→発足当初は有志の集まり、蔵造りの勉強会という色合いが強く、市に発議する時に目的意識に欠けるのではないかという面や、NPO 法人化したほうが活動の場を一番街商店街だけではなく、より広く活動できるのではないかという意図があり、2002年(平成14年)にNPO法人として登記を行なうに至った。また資金繰りについては市からの補助金はないので基本会費で賄っている。しかし、今の会費(年間5000円)は少し学生にとっては高いかもしれないので安くするべきなのかもしれない。

Q2:実際にどのように事業を行なっているのか、ここまで蔵造りの町並みを繁栄させた苦労は何か。

→恐らく一番街の電線地中化の問題ではないか。ちょうど当時(1991年～92年か)一番街において下水道の整備が行なわれており、その時の会長である原さんがこの工事に目をつけ、市の職員を説得し、りそな銀行や他の住民の方達に電線上部のトランスを敷地内に置いて欲しいと頼み込み、努力実って完成することができた。恐らく今じゃできない工程ではないのか。

Q3:住民との関わりあい、否定的な意見の存在について

→否定的な意見は聞いていない。しかし、一番街が繁栄する前に1975年文化省の調査があり、伝建地区⁷には指定されなかった、もしその時に意見を聞いていたら違ったかもしれない。しかし、約25年後になり伝建地区に登録されて以降は蔵の会が開催するイベント等で住民の方との意見を聞ける機会もある。

Q4:一番街を少し下ると大正浪漫通りがあるが、浪漫通りとの商店街組合やクレアモール付近の商店街との係わり合いが存在しているのか

→(係わり合いは)少なくなってきたはいるが、クレアモールの商店街組合や大正浪漫通りの店主の方達との面識はあり、互いの持っている情報の交換を行なっている。

Q5:どのような気持ちで町並み保存に取り組んでいるのか

→「川越蔵の会」は観光を意識したまちづくりをしてはおらず、何より優先しているのが「自分の町だから」という町に対する意識だと思う。この意識が市の職員や町並み委員会の方にもきっとあると思う。蔵の会は率先して先頭に立ち、まちづくりの音頭を取ることはしないが、黒子としての役割を担っていきたい。

Q6:今後 川越一番街をどのような町にしていきたいか

→私一個人の意見になってしまうが、川越一番街だけでなく、本丸御殿などにも観光に来てくれる人が増えてくれると嬉しい。まだまだ川越市内には魅力があるので歴史都市川越市をもっと売りにだしていきたい。また一番街の中で利潤を回すのではなく、外にも利潤を回し、川越市全体でプラスの面もマイナスの面も享受していきたい。

上記のような質問を野本様に行った。そしてヒアリングを行なう中で「川越蔵の会」の会報、総会資料を頂き、その中を見ると会の目的が以下のようにあった。

“地域に根ざした市民としての自覚を持ってまちづくりを自ら実践するとともに、住民が主体性を持って行なうまちづくりの支援を行なうことによって地域社会の発展に寄与することを目的とする“

今回、ヒアリングをさせて頂いた後に読ませて頂いたものではあるが、創設当初の目的をしっかりと受け継いでいるからこそ今の川越一番街があるのだなと感じずにはいられない。「川越蔵の会」の「地元愛」のような意識を感じることができた。しかし、川越には後継人の問題のほか、利潤の配分が外にまで行き届いていないという問題がある。川越市全体の収益の大半を観光費で補っている事実の両面を見ると、軌道に乗ったことに安住してしまい、努力を怠ってしまっはならないだろう。

⁷ 重要伝統的建造物群保存地区の略称。この地域に選定されると国の補助金が得られるなどの優遇措置を取ることができる。2015年現在では110地区が選定されている。

2-4 オブザーバーとしての「町並み委員会」

「町並み委員会」の歴史や概略は前で述べてきた。彼らは1998年に一番街が伝建地区に制定される前に一番街の景観を保つための町づくり規範を作成し、この規範の理解を求めてきた。これが「規範」とされる理由は決して、住民をルールで縛り付ける訳ではなく、あくまで規範として留めておくことに意味があるようだ。これは「町づくり規範」のはじめに。の部分において読み取ることができる。

“(中略)町並みは、自由な個人の努力が交響し、単独では得られない一段と高い価値を実現するとき、限りない魅力を発揮するのだと言えよう。川越一番街商業同組合は、自立的な個人の努力が一番街再生へ向けて結集されるよう組合員の総意に基づき、本協定書を定める”(町並み委員会 序章部分より)

当初より、委員会は人をルールで強制して「できあがった」景観を構想していたのではなく、住民や店主の裁量に任せ、「人がつくりあげていく」景観の構想を持っていたとすることができるだろう。前の部で記述した川越蔵の会とのヒアリングと見比べてみると蔵の会自身も誰かに命じられたからやった、というのではなく、自分がこの町が好きだから、という理由で動いていることがここからも読み取ることが出来る。外部からの企業であるコンビニエンスストア「Sunkus」が川越一番街に参入してきた時もこの規範に従い、自ら蔵造りのコンビニエンスストアを作るなど自主協定だから、規範だから、と破るわけでもなく、蔵造り準拠した作りをしている。ここに川越一番街の人間が、または一番街に参入した者が持つ共同的な意識が表れているだろう。「郷に入りては郷に従え」という意識が資本主義社会において通用していることは実に興味深いことであると思う。

写真 2-2 Sunkus 川越 時の鐘店



(近所を旅しよう！からの写真引用)

この「町づくり規範」の中身を見ると1～67までの規範がある。しかし、これらの規範全てを守らないといけない訳ではなく、規範のみを純粹形として表現するのではなく、規範と自分の意見とを融合させた形として看板や建築物として表現することが認められている。⁸また細かい話になってしまうが、伝建の建築様式というものが規範の中で決められていて、景観基準(消極的基準であると思われる)が伝統的建造物の“建築様式”を踏まえた質の高い意匠⁹が求められており、修景基準(積極的基準)では“建築様式”に準ずるもの¹⁰が求められている。外部から参入する企業は主に修景基準を満たせば、川越一番街に参入することができる。恐らく、「町並み委員会」が設計したこの規範によって伝建地区として川越一番街が認められた、と言うことはできないだろう。しかし、それまでにはなかった建築に関する一定の「指標」を導入したことは伝建地区の選定に多いに役立ち、川越一番街を法の保護下に置き、外部から守ったという点は評価することが可能であると思う。さらにはこの「指標」はこうして未来にも通用する規範として生き続けている。この二つの点は多いに評価すべき点と言える。

委員会は町並み保存に関して、蔵造りだけではなく、時代の変化も視野に入れた保存計画もしており、現代を代表する建物などの参入も原則を守る必要性はあるが、容認していることから察するに歴史に拘泥してはならず、変化を受け入れつつ、新しさと「旧さ」を融合しようとする試みがあったからこそ、こうして評価をされてきたのではないだろうか。

しかし、1988年に制定されたこの町並み規範だが、現在も一番街の中においてまちづくりの指標として

⁸ 規範の中で「～でなければならない。」「～以内でなければならない」という記述は見当たらず、「伝統を踏まえ、工夫する」、「～であるのが良い」という客体に対して柔らかい物言いをしている。

考えられている。ではこの規範はどのような過程を経て生まれたのだろうか。

「町並み委員会」は一番街商店街の店長や都市計画の研究者、川越蔵の会の代表者など約 20 名で構成されている。委員会結成当時、まさに川越一番街はマンション建設反対運動が盛んな時であり、1987年の委員会結成、そして翌年には規範を生み出している。したがって、わずか一年で 67 項目からなる「町並み規範」を生み出し、この規範が川越一番街において受け入れられたのだ。この規範は当初、行政が 1981 年に「川越の町並みとデザインコード」報告書というまちづくりのルールを発行したが、川越住民に受け入れられずに終わったものを、今度は住民側がルールとしてではなく、規範として打ち出したものである。そしてこれは住民に受け入れられ、現在の繁栄がある。行政の出したデザインコードは何故受け入れられなかったのかというと、これは恐らく川越一番街のアクター達がまちづくりに関する知識や理解の深化が行なわれていなかったのではないかと考えられる。デザインコードを見ると、住民、専門化、行政などの手を携え、まちづくりを行なう必要性を説いている部分があり、この論文の中でもこれらのアクターが手を携える必要性を述べている。このことは現在のまちづくりに欠かせない内容が組み込まれているように思える。このデザインコードの発行の後、「川越蔵の会」が生まれ、アクターのまちづくりに関する知識の深化が行なわれたのではないだろうか。私は一番街のアクターが具体的にどのような勉強会を行なったかなどは知りえないが、2 章の図 2-2 の年表を見ると、行政からデザインコードが報告され、住民には受け入れられなかったが、住民側これが契機となり、まちづくりを真剣に考えはじめまちづくりに関する知識を付け始めたのではないだろうか。そして規範が受け入れられる状況を作り出している中で町並み委員会も実際にマンション業者と話し合い、2 件の計画を保留にまで持ち込み、蔵造りを守っていった。この中で「建造物を新築、改築する際には、蔵造りの町並みに合致した建物にしないと、地域社会でくらしにくいといった風潮が生まれてきた」（溝尾、菅原 pp313）と溝尾氏と菅原氏は述べている。これが「町並み規範」が形成されていく過程だが、この中で注目しなければならないのが規範によって生み出された「ゆるい拘束力」のようなものである。このことは 4 章部分で述べることになるが、これと同時にまちづくりが行なわれていく過程の中で失われていった声というものの存在にも 4 章部分で触れていくことにする。

また実際に町並み委員会に建築審査を頼むと「町並み委員会が改装計画の相談を受け、規範に基づき、助言・指導を行い、それに従った改装に埼玉県的高度化資金融資⁹と市・県の観光市街地形成事業補助金が出る」（伊藤 pp17）とあるように、経済的な補助の手伝いも行なっている。

2 章部分は現在の川越一番街において活動するアクターの「川越蔵の会」と「町並み委員会」を取り上げた。これらのアクターが保存活動を始めた初期というのは観光客数の伸びも決して良いといえるものではなく、何故この時期にあきらめずにこの活動が続いたのだろうか、と当初から疑問に感じていた部分があった。調査の中で多くの川越に関する資料を見聞きした。ヒアリングも行ない、川越に一貫して言えることが存在するアクターの川越の好きな気持ちである。二つに川越保存を行なうアクター同士のコミュニティの「厚さ」のようなものを感じられた。「川越蔵の会」が行なう、観光の為ではなく、住民の為のまちづくり、蔵造りの町並みが好きだ、という意識をまちづくりという行動を通して表現することで互いのアクター同士の気持ちを確認しあう事ができているからこそ、今の町づくりがあるものであると考えられる。またもう一つの要因にこれらのアクターが生まれる約 3 年前に川越一番街商店街活性化モデル事業調査、通称コミュニティマート構想が始まり、ある程度の数々の観光客を呼び戻すことに成功し、川越店主達は手探りながらも、一番街のまちづくりを行なっていた。

⁹中傷企業でつくる協同組合や商店街の土地、建物、設備投資などに長期無利子か低利子で県と国が融資する制度(コトバンク)

3章 現在の川越がある理由

3-1 一番街商店街や菓子屋横町などの商業が作る川越イメージ

2章においては一番街商店街がどのように保存されてきたか、そこにどのようなアクターが関わっていたのかということ述べてきた。この章では伝建築に制定され、法の保護下に入った川越一番街自身がどのような理由で集客性を高め、現存できているのかについて述べていきたい。

川越大火の後の蔵造りの建築は約30件現存している。「伝建築の概要」を見てみると、伝建築内にある建物構成を見ると、蔵造り町家が20件、倉庫(土蔵)が30件、真壁造り町家が16件、洋風町家が6件、和風住宅が16件、洋風住宅が2件、近代洋風建築が2件、その他が29件、合計122件が伝建築内に存在することになる。町家と住宅の区別だが、町家というのは人が住む施設と店としての機能を併設したものであり、住宅は店としての機能を持っていないということを予め解説しておく。またこれらの伝建築の範囲内に存在する全ての建物が保存対象ではなく、保存対象(伝統的建造物)として認められているのは約70店舗程である。この約70店舗の内、川越一番街に接する伝統的建造物は約30件である。これら30件が川越一番街にてどのような商業形態をとっているのかを見ると半数以上が飲食関係に従事しており、次いで装飾品店があり、鋼鉄店(包丁や刃物類を販売)が数店見受けられ、ヤマト運輸、歯科院といった地元の住民向けの建物もわずかに存在している。

表3-1 伝建築内の建造物

| 建築様式 | 件数 |
|--------|-----|
| 蔵造り町家 | 20 |
| 倉庫(土蔵) | 31 |
| 真壁造り町家 | 16 |
| 洋風町家 | 6 |
| 和風住宅 | 16 |
| 洋風住宅 | 2 |
| 近代洋風住宅 | 2 |
| その他 | 29 |
| 合計 | 122 |

(『伝建築の概要』 川越市 都市景観課より)

一番街の中の店舗を見てみるとテナント¹⁰として入っている店が半数以上見受けられ、外部からの参入者が蔵造りの建築を借り、商業を営んでいることになる、恐らく事情は様々であるが、市が都市景観条例を設定し、補助を与える形となった今、観光客を相手に商売をするには条件が揃ったいい施設であると思われる。川越という地域は江戸との交流の中で栄えた「小江戸」ということは1章内で述べた。しかし、現在は主に観光、対観光客に対する物販、飲食料が川越全体を通して主な観光収入源である。また川越は蔵造りの町並みの西側に菓子屋横町があり、観光客は明治の蔵造り町並みを楽しみつつ菓子屋横町に入り、そこでまた物販品を買い、帰っていく。川越の町並みには行政と民間アクターが考えた回遊性があり、観光客は自ら川越というイメージを個人が作り出し、この結果として観光客数、リピーターの増加に繋がっているのではないだろうか。リピーターという言葉だが、この言葉の調査も含め、市が行なっているアンケートを参考に考えてみたい。川越を「初めて」訪れた人は51.8%、2回以上訪れている「リピーター」は48.1%であった。また4回以上訪れるリピーター数が6342人中の21.1%の1342人いることも注目できるだろう。(川越市観光アンケート調査報告書2013年 pp14)こうした観光客は蔵造りを見るだけでなく、しっかりとお土産を購入し、支出を行なっていることもアンケート内で答えられており、「お土産を買った」「支出をした」と答えた人は86.1%を誇っている。お土産に関連し、「飲食店の利用」に関する質問もあり、支出無しが6.9%で残りの93.1%が支出をしている。

¹⁰ 土地所有者と契約を結び、その土地を借り受け、商業を営む形態のこと

また市は観光客のニーズ、要望も調査しており、その内訳を見ると 41.5%が「交通の安全性の向上」を訴えていた。一番街通りの道幅は一般道路と比べると狭くなっている。しかし、これを拡大すると西側に位置する蔵造りの町並みは全て取り壊さなければならず、難しい舵取りを市や店主は迫られていると見るべきだろう。

こうした観光客が訪れることにより市の税収は蓄積され、蔵造りの保存や保護へ回される。明治期の川越商人達と現在の状態をそのまま比べるわけにはいかないが、人の行動を通して富を生み、蔵造りの保存を活かすという行為は非常に明治期と似通った行動をしていると思わざるを得ない。

また川越一番街だけでなく、一番街の北西には菓子屋横町がある。市は観光客が明治の雰囲気「途切れない」ようにする工夫として菓子屋横町に繋がる道を石畳で舗装を行っており、案内看板なども時代を意識した古風な造りになっていた。こうした回遊性をも意識したまちづくりが結果として観光客数を伸ばす要因になっている。こうした回遊性を意識したまちづくりは住民の経済的基盤を生み出す為に 1985 年に行われたコミュニティ・マート構想の中に盛り込まれた要素の一つになっている。

3-2 大正浪漫通りやクレアモールなどの南側の存在

ここまでで、川越一番街で活動しているアクター、店舗の種類や、実際に行なわれているまちづくりがアンケートからも分かるとおり、一定の評価を受け観光客の数が増加をしていることを述べてきた。次に述べたいのが川越一番街のすぐ南に位置する大正浪漫通りである。この通りは銀座通りとも呼ばれていて、その名前の通り、「大正」の雰囲気が感じられるようにファサード¹¹を整え、大正浪漫通りの道路(線)も石畳になっている。銀座通りとして名前が通っていた大正、昭和時代、この通りはまちづくりが行なわれていなかった当時の川越一番街と比較すると、川越の中心地となり、賑わいを見せていた。

写真 3-1 昭和時代最盛期の大正浪漫通り



(大正浪漫通り ホームページより)

しかし、昭和時代が過ぎ去ると西武線本川越駅に集積し始める大型商業施設に客足を取られてしまう。この歴史は 1-3 部分と同じであり、大正浪漫通りもこのことを危惧していた。大正浪漫通り商店街の店主達は悩んだ結果、大正、昭和時代において画期的であった全釜式アーケードを取り払い、川越一番街と同じく電線地中化を行い、開放感ある雰囲気にまちづくりを行なった。大正浪漫委員会委員長の石黒氏はこのまちづくりを「老朽化したアーケードを撤去することによって建物を表に出し、修復・保全を図り、どこにでもありそうな寂れた古いアーケード商店街というイメージを一掃し、大正浪漫の魅力的町並みを作り出し、イメージを一変させようとするコンセプトがみんなのものとなるには大変な決断が必要となった」と述べている。当時、最先端と謳われていたもの、アーケードなどを撤廃しなければならず、川越一番街の例とは違い、アーケードに「付着」した古臭いイメージのようなものでは「ウリ」として観光客を引き寄せられない。大黒氏の文も述べているように当時の大正浪漫通り店主の気持ちは如何ばかりかと思わずにはいられない。しかし、当時の店主達はこの決断を行なったからこそ、現在の大正浪漫通りが存在している。

¹¹ 西洋的な建物の正面部分のこと、景観維持の為、建物の表面を覆うことを指す。

●大正浪漫通りにおけるまちづくりの経過

表 3-2 川越市 刊行 まちづくりのデザインより

| | |
|--|------------------------------|
| 平成 4 年:川越銀座町並み整備委員会の設置、計画協定に関するワークショップ | 平成 10 年:バリアフリー策定調査 |
| 平成 5 年:「街なみ及び環境整備実施計画」策定 | 同年 10 月:川越商工会議所 文化財登録 |
| 平成 6 年:大正浪漫のまちづくり推進委員会にて協定検討 | 平成 13 年:歴路事業 大正浪漫通り線 完成 |
| 同年 6 月:大正浪漫のまちづくり協定締結 | 平成 14 年:彩の国さいたま景観賞「大正浪漫夢どおり」 |
| 同年 8 月:大正浪漫委員会及び専門部会を設置し、規範を設定 | |
| 同年 10 月:まちづくり規範の制定 | |
| 平成 7 年:アーケードの撤去 | |
| 平成 9 年:大正浪漫夢づくり設計コンペ開催 | |

大正浪漫通りにおけるまちづくり協定、基準も川越一番街同様に決まっており、例を挙げるなら建物デザインは伝統的建物において、原則的に創建時のデザインに準拠したファサードを用いること、高さの設定は周囲の建物に合わせる、色彩は原色を避け、大正浪漫のイメージに相応しいものとする、といったことが基準として定められている。

写真 3-2 アーケードが撤去された大正浪漫通り



(大正浪漫通りホームページより)

アーケードの撤去を行い、平成 14 年には景観賞を受賞した大正浪漫通りだが、ここに立ち並んでいる商店は電気店、精肉店、文具店などがあり、川越一番街商店街と比べると観光客に特化した訳ではなく、地元の人達に向けた商売に目を向けているものではないかと思われる。こうした一見地元に向けた商品を取り揃える商店街がアーケードの撤去や電線地中化を行なえた理由には一つに店主同士のコミュニティの強さ、その店主達と市行政、さらには「川越蔵の会」、「川越商工会議所」との意見交換の場を設けたこと、二つに地元の消費者たち、住民の理解があったからこそ成しえた事業であろう。

さらに大正浪漫通りは定期的にコンペも開催しており、外部からのまちづくり、店舗作りに関する意見を取り入れており、1997 年に行なった設計コンペの様子(一般の方が気に入ったデザインに投票する)を大正浪漫委員会の羽生 修二氏はこう述べている「(前略)地元の人たちも観光客も、思い思いに作品を楽しそうに選んでいる光景は、非常に穏やかなものであり、大正浪漫の夢の世界にそれぞれがタイムスリップしているかのような雰囲気だ。」

恐らく大正浪漫通りの店主達、住民も商業や観光を優先しているのではなく、住んでいる町に対する帰属意識が強いからこそ、まちづくりもコンペも行なわれ、成功を収めていると言えるだろう。

川越には川越一番街、大正浪漫通りの他に新富町からサンロードが存在している(地図 1 参照)。この部

分は現在の川越の商業集積地ともいえる場所であり、川越一番街、大正浪漫通りとは違い、コンビニエンスストア、飲み屋のチェーン店など雑多な店舗が立ち並んでいる。駅近いこの商店街も駅に近いということで駅の再開発が行なわれる際、当時サンロード商店街とよばれていた商店街も再開発に伴う道路計画が立ち上がり、商店街の解体が始まりかけていた。この部分の商店街は西武線本川越駅から東武東上線川越駅に繋がる約 1.3km 程の道のりで、一つのサンロード商店街で構成されているのではなく、川越新富町商店街、川越サンロード商店街と別組織で構成されており、平成 11 年に名前のみが「クレアモール」として統合された。

表 3-3 川越市 刊行（まちづくりのデザインより）

| | |
|--------------------------------------|------------------------------|
| 昭和 59 年:新富町まちづくり協議会、研究会の設立 | 平成 9 年:サンロード商店街側のモール化完成 |
| 昭和 60 年:来街者アンケートの実施、アンケート結果のパンフレット発行 | 同年 4 月:一般公募による道路愛称決定「クレアモール」 |
| 昭和 62 年:まちづくり協定の検討 | 平成 11 年:クレアモールのモール化事業が完成 |
| 昭和 63 年:新富町まちづくり協定の設定 | |
| 平成 1 年:協定パンフレットの発行 | |
| 平成 3 年:サンロード商店街も同内容のまちづくり協定施行 | |
| 平成 7 年:モール化計画、電線地中化開始 | |

商店街を保存するために商業組合を結成、研究会を立ち上げ、新富町商店街とサンロード商店街で議論を重ね、来街者のアンケートを取り、客観的な意見を取り入れることで生き残ることができた商店街である。前述したようにこの商店街は「昭和」のような雑多でまとまりがない雰囲気が感じられるかも知れない。しかしこの商店街にもまちづくりの基準は存在しており、例を挙げるならばクレアモールに入る店舗の建築デザインは「街との調和を図りながら、個性を活かす」、「看板は極力小さく」「はみ出し営業は一切行なわない」等を定めている。このような基準を設けた背景には同時期にまちづくりを行なっている川越一番街、大正浪漫通りを参考、ライバル視したものと思われる。

この地域も「明治」の町並み残る川越一番街と「大正」の町並みを残す大正浪漫通りと同じように保存アクターを立ち上げ、議論を重ね、住民の意見も取り入れ、まちづくりを行なっている。「昭和」のような雑多な店舗が立ち並ぶこの地域においても、緻密で、真剣なまちづくりが行なわれており、店舗、店主同士が互いに関わらず、協力を行なわなかったら現在の有形形をしていなかったのではないだろうか。

写真 3-3 現在のクレアモール



川越新富町クレアモールホームページより

3-3 行政、住民、川越蔵の会、町並み委員会の繋がり

3-2 においてはアクター同士が自分の商店街、街を保存する経緯や具体例を述べてきた。そしてその中において「明治期」の町並みを残す川越一番街、「大正期」の町並みを残す大正浪漫通り、「昭和」の町並み、雑多性を残すクレアモール、これら三つの時代を保存するアクターと経緯に一定の共通項を見出すこ

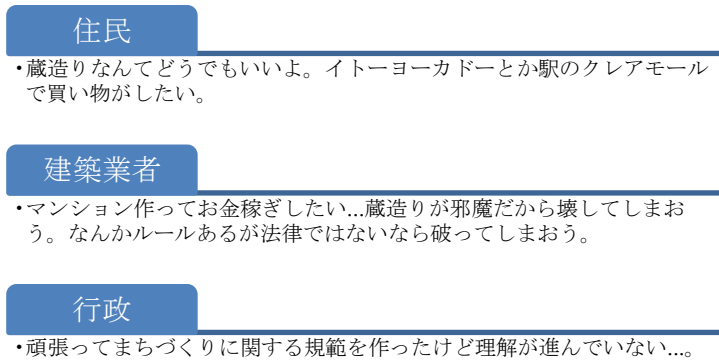
とができた。ここではそのアクター同士の繋がり共通項について述べていく。

まずアクター同士の繋がりだが、川越のまちづくりを行なっている主なアクターに「川越蔵の会」「町並み委員会」「行政」「住民」を挙げることができる。「川越蔵の会」「町並み委員会」「行政」、これら3つのアクターはまちづくりの歴史を見ると、川越一番街、大正浪漫通り、クレアモールなど地域の垣根を越えてアクター同士(商店街のまちづくりという観点では店主同士と置き換えても問題ないだろう)が関係しあっている。その中で「川越蔵の会」「町並み委員会」は自分の町に対する所属意識、自分の町をより良くしていきたい。という意識が第一にあり、その意識の具体的な表現方法として川越一番街における伝建築の選定活動、調査、川越一番街から大正浪漫通り、クレアモールに至るまでの電線地中化事業、各商店街が策定したまちづくり規定など様々に見ることができる。所属意識のきっかけの発端は外部からの専門家からの提言や川越青年会議書からの発案など様々であろうが、この自分の町に対する所属意識が川越一番街、大正浪漫通り、クレアモールにかけて各商店街店主、行政に存在しているのではないだろうか。このように考える理由に、川越市 都市計画部 都市景観課の大竹様のヒアリング内容がある。

「蔵の会や委員会は月に1回会う機会があり、その中でこれからのまちづくりに関して話し合いをしている。」と語ってくれた。行政を絡めた話し合いの場が定期的に設けられている中で、自分の商店街に無意識のまま、話し合いに参加し、ここまで良いまちづくりを行う事が可能なのだろうか、ここでは川越市のまちづくりがここまで成功しているという事実がこの仮定を否定するに十分の説明理由を持っている。そしてアクターが行なうまちづくりを受け入れ、ある意味で評価を行なっているのが「住民」というアクターである。川越一番街においては主に店主達が「住民」としてこの論の中では考えているが、勿論大正浪漫通りやクレアモールには専業主婦の方、中高生なども「住民」ここでは利用者とも言える立場から評価を行なっている。まちづくりを行なう過程でアクターはしっかりと住民の意見をアンケートなどの形で汲み取り、反映を行なっているといえるだろう。

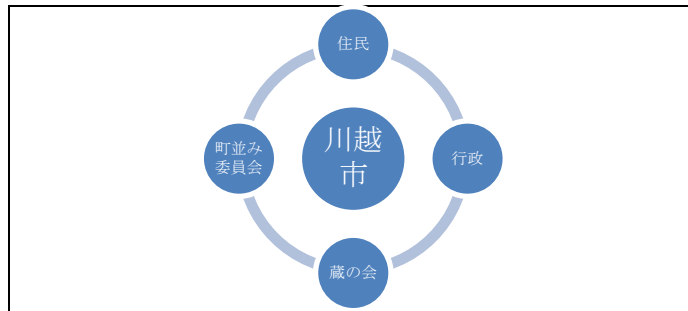
次に共通項の部分だが、繰り返し述べていることになるが、どのアクターも川越市の観光の為に、とまちづくりを行なっているのではなく、自分の町だからという町に対する愛着や帰属意識が存在していた。またこの感情や意識がゆるい規範を生み出し、この規範の中でこれからのまちづくりを考えていくことができることこそが川越のまちづくりの強さとも言えることができるのではないだろうか。つまり、規範が川越店主達を強制を行なわない形でまとめることに成功し、ゆるい規範の中に生まれた自由の中で店主達が自分達のオリジナリティを出すことができたのである。

図 3-1 町並み保護の経緯



↓
商業の中心が南側(川越駅方面)になり、1960年代頃に蔵造りの商家が取り壊され、これが契機となり学識者や、川越青年会議所のメンバーが蔵造り保存の取り組みを始める。また一番街商店街活性化の為にコミュニティマート調査や町並み委員会が結成され、「町づくり規範」が委員会の手によって作りだされた。

↓
現在の川越一番街のアクター同士の関係図



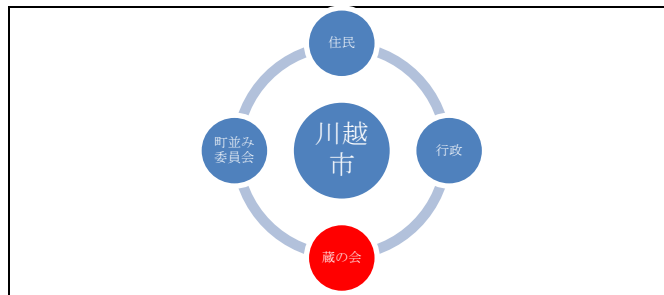
このアクター同士の関係が崩れなかった要因は主に二つあるのではないかと考えられる。一つにコミュニティマート構想で、川越一番街の店主達は手探りながらも、なんとか自分達が生き残る術を模索することができた。この時、2015年の現在ほどではないが観光客は戻ってきていることが分かる。そして観光客数を戻す、ことから増やす、ことができたのは町並み委員会によって作られた町並み規範によってアクター全体がまちづくりのビジョンをある程度見渡せるようになったことが大きいのではないだろうか。このことは観光客数の増加が、その成果として物語っているのではないだろうか。

4章 歴史を活かしたまちづくりの可能性

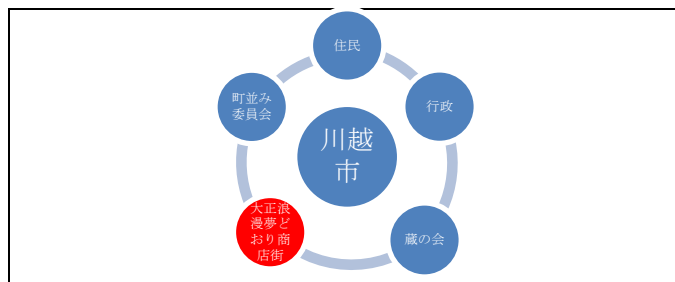
4-1 「明治」、「大正」、「昭和」、「平成」の時代コントラスト

川越には「明治期」の町並みを残す西武線本川越駅北部に位置する川越一番街、その少し南に位置する「大正期」の町並みを残す大正浪漫通り、そして本川越駅の隣に位置し、東武東上線川越駅近くまで伸びている「昭和期」のような雑多性を残すクレアモールが存在していた。そしてここではさらに、1960～70年以降に大型商業施設や百貨店等がある西武線本川越駅周辺を「平成期」と置いて時代のコントラストについて述べていきたい。このことは地図を見れば一目で分かる事だろう。また「明治」「大正」「昭和」の町並みがどのように形成されてきたかは前部にて述べてきた。この時代コントラストは行政が狙って、このようなコントラストを計画的に作ったものではなく、アクターがまちづくりを行なう過程、つまりアクター自身が持っているこの町が好きだからという帰属意識が表出された結果として生み出されたものといえる。このことも前章にて述べてきた。このコントラストが生まれた要因は地域を越えたアクター同士の交流に理由を求めることができると思う。以下にそれぞれの地域のアクターの関係図を書き出してみた。

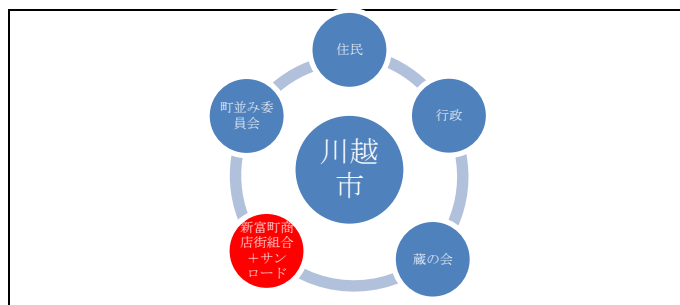
図 4-1 川越一番街、大正浪漫通り、クレアモールにおける各アクター間の関係



大正浪漫通りにおけるアクター



クレアモールにおけるアクター



(ここではまとめて「町並み委員会」、「川越蔵の会」「行政」と述べてしまっている。ここで注意しておきたいことが、大正浪漫通りにおいてもクレアモールにおいても登場する「川越蔵の会」のアクターであるが、大正浪漫通り、クレアモールにおいて「川越蔵の会」は、他の地域のまちづくりに対して意見、助言を行なうなどの補助的な役割であるということに注意しておきたい)上の図ではその地域のまちづくりの核ともいべきアクターを赤で表している。この赤で示したアクター同士のまちづくりに関する意見や、コンペ等の交換がコントラストの形成を強めたのではないだろうか。これは川越市役所の都市景観課と「川越蔵の会」の両者にヒアリングした際、どちらのアクターも「人との利害関係の調整の大切さ、話し合いの場を持つことの大切さ」を強調していたということが裏づけになるだろう。またコントラストを強めた理由に「住民」のニーズが存在していたから、という方向からもアプローチができるのではないか。もし仮に川越一番街からクレアモールにかけて全てが明治期の町並み、全てが大正期の町並み…と考えていったらどうであろうか。住民(店主)はそれでもいいかもしれないが、それではその他の一般住民のニーズを満たせなくなり、成り立たなくなってしまうだろう。一番街では住民(店主)のニーズを、大正浪漫通り、クレ

アモール、西武線本川越駅周辺においてはその他の一般住民のニーズがあり、これがある程度のコントラストの方向性のようなものを決定づけていると言えよう。「住民」のニーズを捉え、なおかつ行政をも巻き込み、まちづくりを行なうアクターの活動があったからこそ現在の川越のまちづくりは成功したのだろう。

4-2 残った歴史と残らなかった歴史

4-1 では川越のコントラストの形成について述べてきた。しかし、川越において「明治」「大正」「昭和」のまちづくりが行なわれていき、川越が繁栄を遂げていく中で失われていった歴史について言及していきたい。まず川越一番街において失われた歴史についてみていきたい。ここは先祖代々から蔵造りで、観光客に対して物販を行なっている店もあれば、観光が進む中でテナントとして蔵造りを観光しにくる客、云わば、居住や、商業をやっていたにも関わらず、テナントを受け入れ、自分はどこか別の場所へ移っていく所もあるのだろう。川越一番街の地図を見れば分かるとおり、テナントとして蔵を借りている店舗が見受けられる。次に大正浪漫通りにおいてもその周囲を見たところ、シャッターが下りている建物が数箇所見受けられた。クレアモールにおいても全ての店舗がコンビニエンスストアのように開いているかと言われればそうではなく、シャッターが下りている場所もある。今回、この調査を行なう中で川越が非常にまちづくりに意欲的で住民もそれに賛同する形で一つにまとまったまちづくりを行なっていることに私は非常に感銘を受けた。川越におけるまちづくりが評価されている中で住民というアクターの中にどこか影のようなものを落としこんでいるのではないだろうか。

このことを考える時、「沈黙の螺旋」¹²という言葉が非常に私の中でこの事態を的確に言い表していると思う。つまり、川越一番街からクレアモールにかけてまちづくりがアクターの手によって一つにまとまって行なわれていく最中、抜け落ちてしまったアクター(ここでいうならば少数派)が存在しているのではないだろうか。実際にどれほどの数のアクターがまちづくりを行なわれていった地域から離脱していったのか、何故離れてしまったのかなどの理由は聞く事ができない。しかし、人で溢れかえり、車が通行困難なほど通行人の数が多一番街、レトロな雰囲気が感じられ、タイムスリップしたような感覚を楽しませてくれる大正浪漫通りだが、その盛況ぶりが逆にその町並みに入るまでのシャッターが下りた家屋の印象が私にとって忘れることができなかった。

この落ちてしまった歴史とは逆に、勿論このまちづくりの流れを利用し、自らもまちづくりに参加しにいったアクターも存在しているだろう。これらのアクターは川越が売りにしている「古さ」と川越がこれから受け入れるであろう「新しさ」の両方の存在を認識し、まちづくりを応援しているアクターとも言える。具体例を指すなら川越一番街の店主や、外部からテナントとして入った企業、大正浪漫通り、クレアモールの店主達がこれに当たるだろう。彼らは明確にこの町が好きであると言う意識を持っている。外部から参入してきた企業もまちづくりと共に作り出されたゆるい規範の中に入ることによって、次第に同化していき、まちづくりを率先して行なうようになっていくのではないかと。Sunkus の例は失敗に終わってしまったが、現に川越一番街にテナントを出して成功を収めている店舗が多いのもまた事実である。

¹² ノエル＝ノイマンが提唱した元々は政治、マスコミュニケーションにおいて使用される仮説である。多数派で意見の総意が占められている時、少数派は意見を行わず、自ら沈黙を選択し、この流れがさらなる沈黙を呼び起こす。

町並み規範のゆるさ、があるからこそ、外部からの店舗が参入して来ることが可能となり、結果的に川越一番街を盛り上げる要因の一つになっているともいえるだろう。

4-3 歴史を活かす方法…川越を学ぶ

川越のまちづくりの過程を見ていくと、やはり歴史を、地元の景観を維持したいという強い気持ちがアクターには存在していたということは今まで述べてきたことである。では川越を学んで他の地域が歴史的建造物などを保存しようとする場合、川越一番街の例を見て学べるということはあるのだろうか。他の地域でも 1950~60 年代のように歴史ある建物を破壊して新たな建物を建てようとする動きは決して川越だけにある訳ではない。

このことを考える時、ESPLANADE(エスプラナーデ)魅力ある街づくり の中で川越市市長舟橋功一氏(現川越市市長は川合善明氏)と蓑原敬氏との対談で川越市におけるまちづくりに対して興味深い意見を述べている。

舟橋:(前略)行政主導ではなくて、(川越のまちづくりは)住民から出たまちづくりなんです。現実に昭和 56 年に 16 箇所、蔵を市の文化財に指定しまして、当然これは補助金として修理代を半分出すとか、固定資産税の減免もやりました。そして景観条例つくったり、伝統的建造物群の保存条例をつくりまして、ようやく今、「伝統的建造物保存地区の指定」のところまでこぎつけました。

これに対して、聞き手の蓑原氏はこう答える

蓑原:結局、今まで行政が介入しようとするれば、都市計画で道路をつくるとか、文化財で蔵を残すとか、つぶすとか殺すかなんです。中で暮らせない、商売が出来ない状態ではだめなんです。ただ、本当は商業ベースで、きちんと自らビジネスに使うところがなきゃいけないわけですが、川越はまさにそれが一つの筋道になったということですね。

舟橋:川越を保存しながら繁栄させることについて、私は市長になりました時にこういう主張をしているんです。これからは高齢社会の時代ですから、「福祉充実、住み良い環境、歴史を活かした活性化」と。申しますのは、歴史と伝統をうまく活用し、悪く言えば、利用して活性化しなきゃだめだ。

蓑原:(前略)自分達が”お店を資産として活かそう、歴史を活性化に使う”というところは生き残っていますけれども、主体性がないとやっぱり落ち込む。これは仕方ないですよ。

舟橋:そう思います。補助金を出すという問題がありますが、当然。店をつくるのに出す。道路を直したり、電線地中化は市の単独事業でやっておりますけれども、これは福祉事業と違って、補助金を出して病人を保護するのは訳が違うんですね。「そこで食べていく」という気概を持ってやって頂かないとだめですね。

以上は Esplanade(エスプラナーデ)魅力ある街づくり の中で収録された対談であるが、市長もやはり、住民アクターの大切さを語っているが、これは論の中で述べてきたことだが、この論の中で大切なことは住民アクターに必要な「性質」である。私は論の中で表面的なアクターの活動等を述べてきたが、この対談の中で市長は住民に「そこで食べていく」という気概を求めている。この対談の中で市長は恐らく住民に対して、「表面的な態度のみでまちづくりを行なうのではなく、内面的な、感情的な面も持ったアクターとしてまちづくりを行なって欲しい」と思っているのではないだろうか。経済的基盤がコミュニティ・マ

ート構想を行なう中の努力を重ねた末に生み出され、川越蔵の会、町並み委員会のお陰で川越全体がまちづくりを考え始め、その中心として、川越一番街が再生を遂げた。この過程を見ると、住民アクターが大きな比重を占めて活動しているようにも見えてしまうかもしれない、しかし、川越が再生を遂げるきっかけになったコミュニティ・マート構想の草稿とも言えるべきものは行政が打ち出したものであった。他の論文を見ると、住民が主導的に行なったまちづくりとして川越一番街を挙げているが、きっかけを生み出したのは行政であり、そこから住民、店主達の努力があり、今の川越があるということは忘れてはならないだろう。

終章 おわりに

1 論文のまとめ、論文の関係図

今回、私が論文のメインとして取り上げた地域は川越市にある川越一番街であるが、川越がこれほどまでに観光客が増えた背景には南側に位置する大正浪漫通りや南側におけるクレアモールの存在がある。これらの地域を保存しようとするアクター同士は決して無関係ではなく、歴史を見ていくと一見独立して成り立っているように見えるが、具体的に行なったまちづくりの過程(電線地中化など)はある程度の共通項を見出せた。共通項として取り上げられるのはまちづくりの具体例のみならず、アクター同士による保存活動の中で見出すことのできた、地元に対する帰属意識や「誇り」と呼べるものを垣間見た。

私はこの論文の冒頭の問題意識の中で、何故川越一番街がこれほど人気を得ることができたのか、古い町並みを保存しているのかということに疑問符を浮かべていた。この論文を記述する中である一定程度の解を得ることができたので私なりの見解を述べておきたい。

まず二つ目の疑問点であるなぜ古い町並みを保存しているのかという点であるが、これは歴史に起因があり、現在に繋がっているということができよう。川越大火の後、川越商人達は「川越の3分の1が焼けた」にも関わらずそこに残り、蔵造りを建てた。この時点でこの問いの答えは出ていたのではないだろうか。この時の川越商人の行動はわざわざ巨費を投じて蔵造りを建て直し、そこから商売を始めている。合理的な利得を求める商人はわざわざこのような行動をするのだろうか。この問いに対する答えは合理的な答えになるようなものではなく、川越商人達が川越に対して帰属意識や誇りを持っていたのではないだろうか。

専門家が提起を行い、「川越蔵の会」が設立されて...と保存するアクターの歴史は辿っているが、この過程の中でまちに対する帰属意識、町が好きだ、という意識が周囲に対してある一定程度の、(それこそ町並み規範のような)規範のような緩い「強制力」のようなものをかけているのではないだろうか。この「強制力」は決して悪い意味の強制の力ではない。川越店主達はいつでも店を畳もうと思えば畳むことの自由がある。そこのお店に新たにテナントとして店が入るだけである。この「強制力」の中で互いのアクターが商店街を越えて、アクター同士が係わり合い、帰属意識の表出先としてまちづくりを行い、継承しているからこそ、美しい町並みを維持することができているのだ。何故川越一番街がこれほどの人気を得ることができたのかという疑問に対しての答えは、「川越蔵の会」「川越町並み委員会」「行政」「住民」が持っていた川越に対する帰属意識の表出先であるまちづくりを行い、その結果として観光客が増加したのではないか。このまちづくりの過程の中においてアクター同士の意見やニーズの抽出を行いルールによって縛り上げるのではなく、ゆるい規範の中だからこそ、柔軟なまちづくりを行なえたのではないだろうか。川越市都市景観課の大竹様は「**川越というイメージが薄れないようにご当地限定などで差をつけて、もっと観光客を呼び寄せたい。**」と語ってくれた。この規範の中でなら、アクター同士のニーズをもっと聞きだし、よりよいまちづくりを行う事で観光客を呼び寄せることは可能なのではないだろうか、と期待を持っている。

この論文の意義であるが、川越がこれほどまでに緻密な計画を建てられて保存される理由は帰属意識(町に対する愛のようなもの)、アクター同士の利害関係の調整と係わり合いの三点が歴史保存には大切であると述べてきた。歴史的建造物を保護しようとするきっかけを作るのは川越の場合は外部からの提言であった。保存を行ないたい歴史的建造物を守りたい内部からの提言を外部に伝えることができれば歴史的建造

物の保存の観点から見れば一歩前進したのと同じなのである。もちろん全ての地域にこれが当てはまるとは著者自身も考えてはいない。しかし、提言を行わなければアクターの形成も保存意識の醸成も行われないというのは自明であろう。

アクターに存在する川越に対する気持ち、アイデンティティや帰属意識というものを考えた時、川越市民にとってアイデンティティの拠り所のような行事が川越氷川祭りなのではないだろうか。川越祭りとは川越祭りは「江戸『天下祭』の様式や風流を今に伝える貴重な都市型祭礼として 360 年の時代を超えて守り、川越独特の特色を加えながら発展してきた。平成 17 年(2005 年)、「川越氷川祭の山車行事」として国指定重要無形民族文化財となった。」(川越まつり公式サイトより)この祭りは昼夜通しで行なわれる祭りであり、29 個の山車が川越中心街を練り歩く。山車が練り歩く中心街は川越一番街を含む所であり、地元の住民(店主を含む)の一大イベントである。山車は町毎に出すことになっており、志多町、幸町、連雀町、新富町、など川越市全体で行われる行事になっている。ではこの祭りがどれ程の規模なのかと言うと、川越市において川越祭りに訪れる観光客の観測が始まった平成 21 年の記録を見てみると 10 月の中旬の休日(土曜日、日曜日)において 75 万人もの観光客が訪れている。平成 21 年以降を見てみると、平成 22 年には 80 万 6000 人、平成 23 年では 77 万人、平成 24 年では 103 万 6000 人、平成 25 年では 56 万 2000 人(この数の低下は 19 日、20 日で雨が降っていた為と思われる)。平成 26 年において、97 万 2000 人、平成 27 年では 92 万 9000 人となっている。この記録は雨天などの影響を考えなければならないが、図 1-X で述べた川越市入込観光客数と見比べてみると、どちらも年が経るにつれて、観光に来る客数が増えていることがわかる。アクターが持っている川越に対する愛着、アイデンティティをさらに分析するならば、恐らくこれから挙げる二つの要因が同時に存在しなければならないと考えられる。一つに経済的要因である。これはアイデンティティの土台とも言える部分であり、まちづくりや、商店街の活性化という目標を達成する為には行政だけの助成金を頼っているのみでは市の財政等を考えてみると継続的なまちづくりや活性化を見込めることはできず、必然的にまちづくりを行なうアクターがある程度の資金を担保しなければ継続的なまちづくりや商店街の活性化は見込められない。二つに心理的要因がある。これは経済的要因の上に成り立っていると考えられる。川越市の場合、まちづくりが上手く行き始め、観光客というある意味でまちづくりの評価を行なう第三者が増えることによって初めて、自分達がやってきたまちづくりや活性化事業の成功を客観的に再確認することができたのではないだろうか。また再認識する過程において 2 章内で述べた「川越蔵の会」のようなアクター同士の関係性を取り持つアクターが生まれ、交流することによって心理的要因が満たされていったのではないだろうか。この要因が満たされていく経緯(図 2-3 年表)と川越観光客数の増加を見ると、やはり年を経るごとに比例してアクター間の関係性を取り持つようなコミュニティの形成が見られる。これら二つの要因が融合して初めて川越のアクターは自らの地域に愛着やアイデンティティ、「誇り」のようなものを持ってまちづくりに取り組めることが可能となるのではないか。4 章にて記述した川越市長舟橋功一氏の話の中にも登場するが、市長はまちづくりを行なうアクター、特に店主(住民)に「そこで食っていく覚悟」の必要性があると言っている。このことは蔵造りの町並みに、引いてはまちづくりが行なわれている、大正浪漫通り、クレアモールにもあてはまる事だが、この市長の一文は仮に店主達に対して、もし仮に前部分において分析したアクターに必要なアイデンティティの内経済的、歴史的要因の片方、両方が欠如したとしても、簡単にまちづくりを諦めるなどということ(アクターの

真摯なまちづくりへの参加)を意味していると捉えることができるだろう。

前部分においてアイデンティティの話を述べ、そのアイデンティティを分析すると中には経済的要因や歴史的要因が含まれていると話した。ではこれらの要因の起源とは何だったのだろうか、より踏み込んで述べるならば、現在の川越で共有されているアイデンティティの原資である。川越市が今のような繁栄に至った最初のきっかけとも言えるだろう。私は2章3章において川越のまちづくりはマンションの建設が地元住民の保存意識を逆に高めたきっかけと述べた。しかし、これは起源ではないだろう。なぜなら「マンション建設に反発することができる心持を持っている」ということは既にアクター間の中に川越に対して希薄ながらも愛着を持っていたことを意味し、マンション建設は川越に存在するアクターのアイデンティティの成長、増幅を助けたに過ぎない出来事だろう。この部分で分析したいことはこの経済的要因と歴史的要因が生まれた原因である。より噛み砕いて言うならば川越一番街に観光客が増え始め、観光利潤が増え、アクター間の中で希望観測が見え始めた要因についての分析を行ないたい。

このことを考えるにはまず、川越一番街に人が来なく、今では考えられないが、シャッターが下りていた時のこと(1970~80年)を考えねばならないだろう。この年代の観光客推移は統計として残っていないが、観光客推移が残っている中で最も古い年は昭和57年(1982年)であり、この年の観光客数は約150万人である。平成26年(2014年)と比較すると500万人もの差がある。ここまでの観光客が訪れるまでにはこの論において述べてきたアクター達の地道な努力、大変な苦心が存在していたことは2章と3章において述べた。しかし、「観光客が増えた」「経済的に一番街が軌道に乗り始めた」という現象は努力や苦心のみではなく、この他にも理由があるのではないかと考えている。

まず(川越一番街)商業活性化という目標を初めて掲げたのが1985年当時の中小企業庁によって行なわれた「コミュニティ・マート構想」がある。コミュニティ・マート構想とは通商産業庁中小企業庁小売商業化の上田隆之氏によれば「コミュニティ・マートとは地域社会に調和した新しい商店街を意味しており、コミュニティ・マート構想とは前述の環境変化等に柔軟に対応し、新たな発想の下に商店街を見直し、地域社会と調和した街、『暮らしの広場』へとつくり変えていこうとすることである」と述べている。さらに上田氏は具体例として、商店街をカラー舗装、コミュニティ・ホールの設置、ポケット・パークの設置など「住」むということに着目した構想がコミュニティ・マーートの根幹にあるとも述べている。

川越市の場合、1985年(昭和60年)から中小企業庁が行なったコミュニティ・マート構想に入る形で川越一番街商店街活性化モデル事業調査の計画が行なわれはじめた。この中で蔵造りの保護に取り組むアクター達は「町並み委員会」を結成し、1987年に「町並み委員会」が「まちづくり規範」を制定した。

この事は画期的であったと同時に、当時の商店街店主や行政はほぼ手探りの状態でまちづくりや活性化事業を行っていたのではないだろうか。経済的に上手く行くかどうかは分からない、しかし川越の愛着は持っているという前述した経済的要因が少し欠けている状態とも言えるだろう。

ここで一つ補足しなければならないことがある。この当時の川越一番街は経済的なアイデンティティが欠け、観光客が増えなかったにも関わらずまちづくりを続けられた理由である。この続けられた理由にリピーターという存在と周囲の氷川神社や川越本丸御城などのシンボリックな存在がある。これらの川越にあるシンボルは補修などは行なわれているだろうが、大幅な改築や改造は行なわなくてもある一定数の観光客はこれらのシンボルを見に川越へとやってくる。これらのシンボルを見に来る中で観光客は(人気がなか

った当時でも蔵造りは存在していたので)まちづくりや活性化が行なわれている川越一番街の過程を見る内に一番街に行けばなにかある、といった「可能性」のようなものを見出し、リピーターとなるのではないだろうか。市の入込調査によると最新版のものだと川越に訪れる観光客の約半数は初めての観光ではなく、2回目の観光となっており、その内訳(48.1%)を見るとこの内の21.1%がリピーターとなっている。

恐らく1960~70年代の川越一番街で商いを行なっている人達は自分達がどのようにしてまちづくりや活性化を行なっていけばよいのかすら分からない状態であり、1985年に入り、コミュニティ・マート構想が打ち出され、構想がきっかけとなりその中で初めて手探りながらも自分達の立ち位置を確認し、まちづくりや商店街活性化の「道」のようなものを見出すことができたのではないだろうか。1960~70年代当時の川越一番街にいた店主や川越市行政は自分達の町がここまで観光客が増え、経済的利潤を生み出すことができるという事は思いもしなかったことだろう。そしてこのアクター達がある一定程度で再生の「道」を手探りながらも見出すことができたのがコミュニティ・マート構想だったと言えよう。

私は当初、この川越が一度寂れた状態から今の繁栄を遂げることができたのなら、この手法を他の地域でも真似てみたら昨今の商店街が抱える問題等を解決できるのではないかと考えていた。しかし、sunkusなど繁栄を遂げている川越一番街商店街(2000年代頃に入店したと思われる)に店を構え、後に撤退してしまう店も中には存在している。この事は一つの答えを出している。川越一番街商店街の活性化をある種のビジネスモデルとして表面的にのみ捉え、その活性化の最中であるその中に飛び込んでいけば、或いはこのまちづくりの真似をすれば利潤を得ることができると考えていた当初の私の考えとsunkusの経営陣は同じような考えを持っていたのではないだろうか。一度、この川越のまちづくりをビジネスとしての観点でのみで見た途端にこのまちづくりは成功しないだろう、なぜならまちづくりのアクターに必要なアイデンティティの要因の内の経済的要因しか満たしておらず、アイデンティティの中にある心理的要因がかけってしまうからだ。このように今のまちづくりは表面的な模倣や利潤のみを見たまちづくりは成功しないだろう。川越の例を見るならば表面と内面の両面を見た「人重視のまちづくり」が成功の要因の一つといえるのではないだろうか。

本論文フローチャート

序章：研究動機や調査対象地域の概要
1章：川越における歴史

時間の経過軸

クレアモール

1950～1970年代、駅周辺に商業集積地が出来ることにより、その恩恵を受ける。

大正浪漫通り

最盛期はアーケードも備えた対象浪漫通りだが、一番街と同様に駅付近の大型商業施設に客足を取られてしまう。

1893年：川越大火

↓
当時の川越商人達が現在の蔵造りの町並みを構築

川越一番街

2章

町並み委員会が生み出した「町並み規範」、民間アクターの「川越蔵の会」ができ、これらの活動は一番街だけでなく、他の地域にも影響を与えていた。

「町並み規範」が作りだしたゆるい規範によりまちづくりの方向性が確立。
コミュニティ・マーケット構想も始まり、一番街の経済的基盤が固まる。

3章 現在の川越がある理由

地元住民の要望を聞きつつも、まちづくりを精力的に行い、一番街とは違ったまちづくりを行っている。

4章 歴史を活かしたまちづくりの可能性

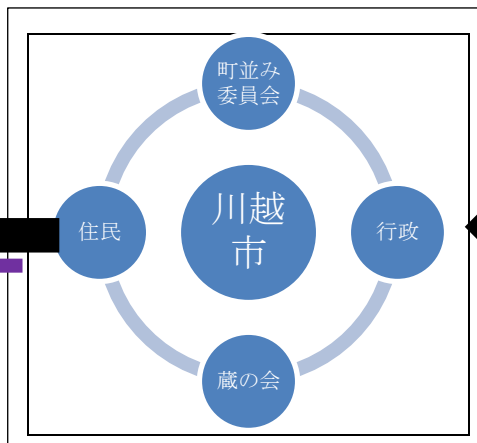
4-1 「明治」「大正」「昭和」「平成」の時代コントラストそれぞれの場所、それぞれの地域で歴史、時代を活かしたまちづくりが可能になった。

しかし、一番街の中から、アイデンティティの形成ができず離脱する店も。(例:Sunkus 川越時の鐘店)

住民(店主)に二つの要因が備わったことによりまちづくりが成功し、持続的な一番街の発展へと繋がる。

経済的要因

心理的要因



川越一番街において住民がアイデンティティの形成に成功し、住民と行政が一つとなったまちづくりの結果として今の繁栄が存在している。

マクロに見た川越中心街

図1.西武線本川越駅付近に大型商業施設が出来始めた 1960～70 年代の川越



図 2 川越一番街において「川越蔵の会」「町並み委員会」などの住民アクターが生まれ、同時にコミュニティマート構想によるまちづくりが始まる 1980～2000 年代



図3 住民アクターがそれぞれ川越一番街に対して帰属意識を持ち、経済的基盤が一番街に出来始め、行政も巻き込んだまちづくりが可能になった1990年～2015年



ミクロに見た川越中心街のアクター間の関係

図4 西武線本川越駅付近に大型商業施設が出来始めた1960～70年代の川越

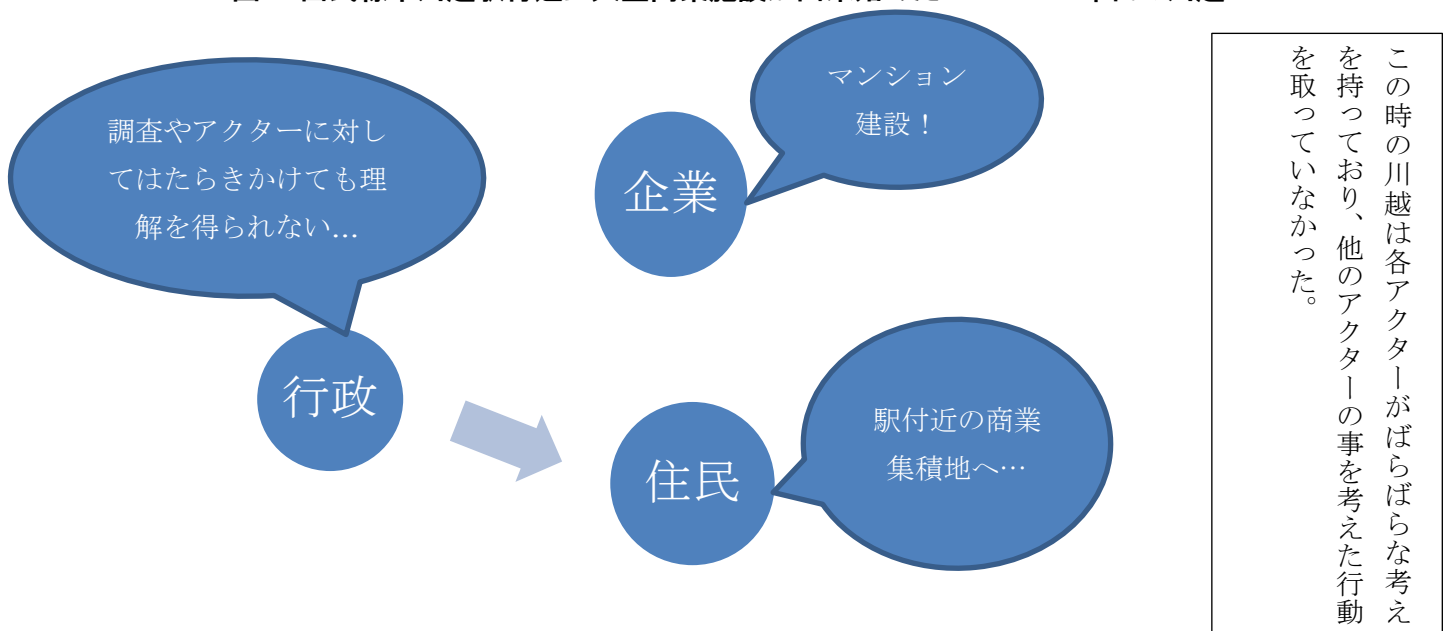


図5 川越一番街において「川越蔵の会」「町並み委員会」などの住民アクターが生まれ、同時にコミュニティ・マート構想によるまちづくりが始まる 1980～2000 年代

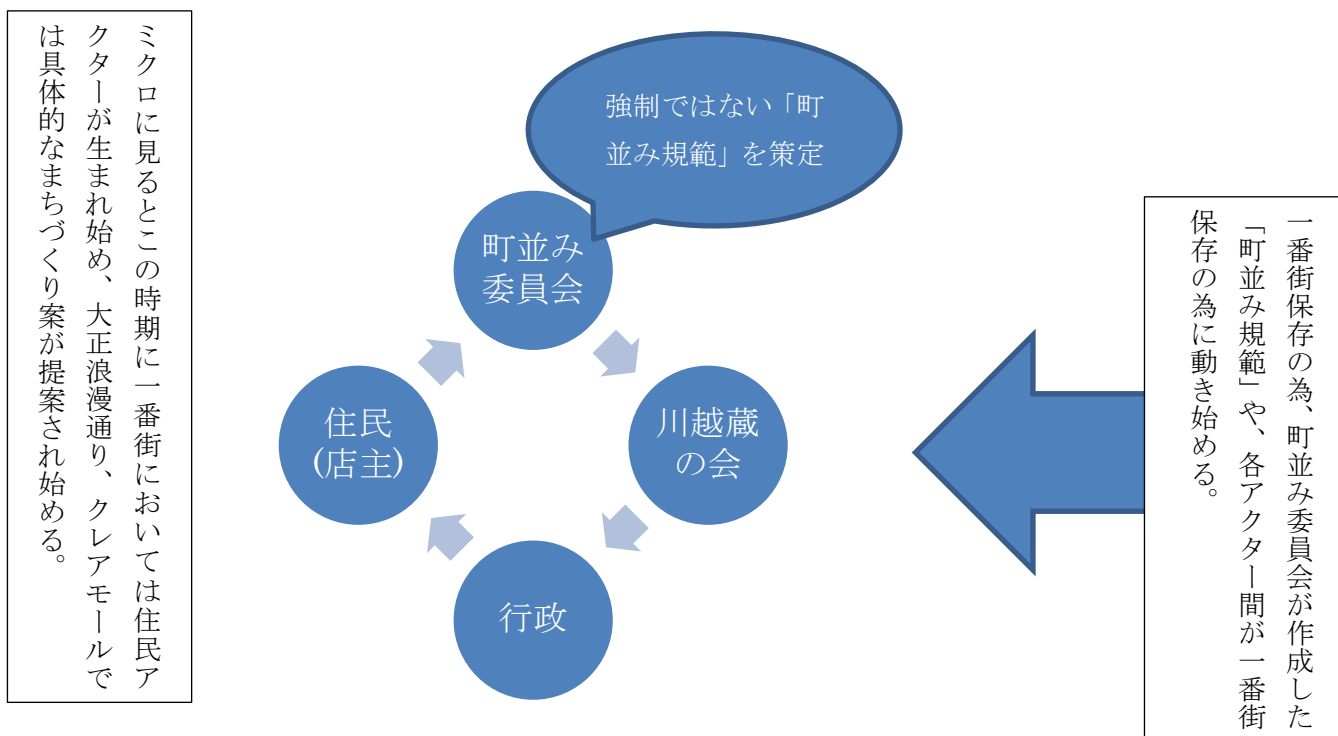
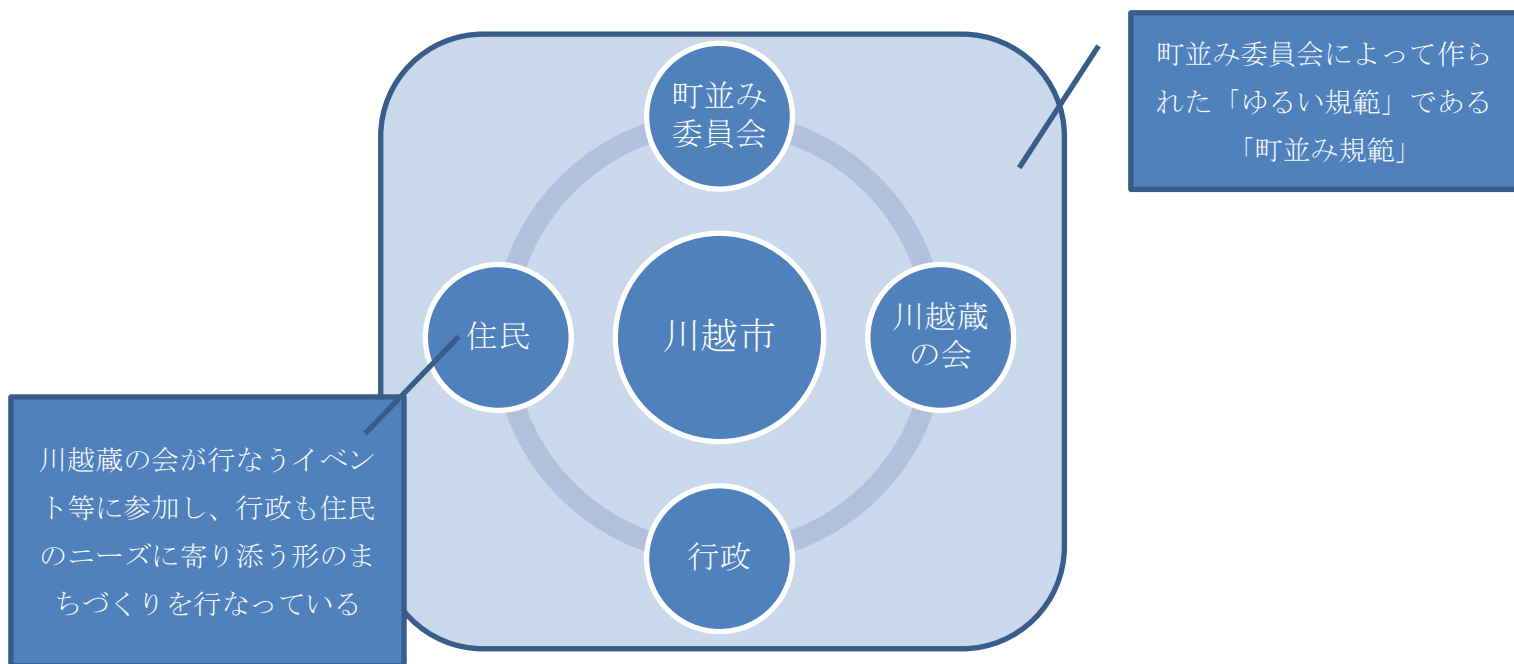


図6 住民アクターがそれぞれ川越一番街に対して帰属意識を持ち、経済的基盤も一番街に出来始め、行政、民間アクター、住民などそれぞれのニーズを満たそうとするまちづくりが可能になった 1990年～2015年



3 謝辞

今回、この論文を作成するに当たり、NPO 法人「川越蔵の会」に所属している野本様、川越市 都市景観課の大竹様には時間をかけヒアリングをさせて頂きました。今この場を借りてお礼を申し上げます。アポイントをとる段階から「川越蔵の会」様や川越市役所様の方にご迷惑をかけてしまいました。そして私はヒアリングをする前は川越市に関する知識を持っていたつもりでしたが、10月の下旬に大竹様に、後の11月初旬に野本様にヒアリングを行なっていくにつれて、自分が川越市について分かった「つもり」になっていたということに気がつかされました。同時にまちづくりを現場で関わり、行なっている方たちのお話のお陰でこの論文を完成させることができました。また両者の方から、川越一番街の「太陽堂」書店さんの紹介を行なってくれたことにより、参考文献の収集効率が飛躍的に高くなりました。今ここで貴重なお時間を割かせて頂いたことを改めてお礼申し上げます。

また主査である浦野教授と同期のゼミ生と共に川越フィールドワークを行い、初めて川越に存在する時代のコントラストなどに気づくことができました。もしフィールドワークを行っていなかったら、この論文の核である4章部分の存在はなかったと思います。またフィールドワークを行なう中で浦野教授自身にクレアモールから川越一番街までの歩き方や、ヒアリング調査対象の選定方法を教えていただいた事により、この論文の道筋を指導して頂きました。また途中経過報告の中で同期の方達や3年の後輩達、浦野教授の助言があったからこそ、この論文があるものだと考えています。謝辞の末尾ではありますが、ここにお礼を申しあげます。

そして最後になってしまいますが、この論文の作成の為に協力して頂いた方々に感謝の意を表し、筆をおきたいと思います。

3 参考文献

- 石原武政（平成 21 年）『地域小売商業政策の展開』
- 伊藤修一郎(2015.12.19 閲覧)『景観政策形成過程における住民組織の役割—竹富島と川越一番街を題材に』(日本公共政策学会) <http://ppsa.jp/pdf/49.pdf>
- 上田隆之, (昭和 61 年)『都市と交通—商店街の活性化とコミュニティ・マート構想について—商店街再発見のすすめ』
- 岡村一郎(昭和 57 年)『川越の城下町 川越歴史新書 1』
- 岡村一郎, 川越地方史研究会(昭和 62 年)『川越歴史点描』
- 加藤忠正 川越市教育委員会文化財保護課『川越 伝統を生かしたまちづくりと地域再生』
- 株式会社 INAX(平成 11 年)『ESPLANADE No.50 春号』
- 川越一番街商店街ホームページ(2015.11.27 閲覧)<https://kuradukuri.com/>
- 川越蔵の会ホームページ(2015.11.27 閲覧)<http://www.kuranokai.org/home.html>
- 川越市(平成 22 年)『かわごえ都市景観表彰作品集』
- 川越市産業観光部観光課(平成 19 年～平成 26 年度)川越市アンケート調査報告書
- 川越市(昭和 53 年)『川越市史歴史研究第 4 巻 近代編』
- 川越市役所ホームページ(2015.12.01 閲覧)<http://www.city.kawagoe.saitama.jp/index.html>
- 川越市都市計画部都市景観課(平成 21 年)『LANDSCAPEDESIGN KAWAGOE』
- 川越町並み委員会 (平成 24 年)『川越町並み委員会』
- 川越町並み委員会 (平成 24 年)『現代に生きる歴史のムーブメント』
- 川越における歴史的町並み保存と観光地域化 (小堀貴亮, 宇野存)
- 川越町並み委員会(平成 26 年)『川越伝統的建造物群保存地区町づくり規範』
- クレアモール川越新富町商店街復興組合 CREAMALL.net(2015.11.27 閲覧)<http://www.creamall.net/>
- 小泉攻, 齊藤貞夫(昭和 59 年)『川越、城と町の歴史』 樹海書林
- 国土交通省(2015 年 12 月 18 日閲覧)『歴史的町並みを生かした商店街の活性化』
<http://www.mlit.go.jp/common/000116024.pdf>
- 坂口安吾(平成 8 年) 講談社『日本文化私観—坂口安吾エッセイ選』
- 櫻井敬子『住民主導のまちづくりをめぐる—川越市一番街商店街の事例から』(平成 23 年)
- 澤崎貴則, 藤井聡, 羽鳥剛史, 長谷川大貴(平成 24 年)『川越まちづくりの物語描写研究—町並み保存に向けたまちづくり実践とその解釈』
- 大正浪漫通り公式ホームページ(2015.12.02 閲覧)<http://www.koedo.com/>
- 特定非営利法人川越蔵の会(平成 27 年)『川越蔵の会会報第 14 回定期総会資料』
- 広瀬瑛(平成 3 年)『小江戸 川越歴史散歩』 鷹書房弓プレス
- 溝尾良隆・菅原由美子(平成 12 年)『川越市一番街商店街における商業振興と町並み保全』